

東京国立文化財研究所要覧

1990

平成2年度

は　じ　め　に

平成2年度は当研究所の前身である美術研究所が設立以来60年の節目を迎え、また文化財保護法が施行されてから40年を迎えた年であった。この間、研究所は先輩諸氏のたゆまぬ努力により充実発展してきたが、平成2年10月にはアジア文化財保存研究室が発足し、5部1室1課の体制となり、アジア文化財保存修復協力センター（仮称）設置に向けて大きく前進した。

その関連事業として、平成2年11月、アジア13カ国及びICCROM（国際文化財保存修復センター）から文化財保護専門家を招へいして「石造文化財の保存」というテーマで、アジア文化財保存セミナーを開催し大きな成果を収めることができた。また、昭和61年から進めてきた敦煌莫高窟壁画保存修復事業については、平成2年12月に敦煌研究院と合意書を取り交わし、平成3年度から5か年間、本格的な研究交流を進めることとなった。また奈良国立文化財研究所とともにICCROMの機関会員として初めて加盟し、さらに平成3年度から在外日本古美術品の修復事業も予算化されるなど、国際的な文化財研究機関として揺るぎない地位を築きつつある。その他の国際交流事業としては、14回目となる国際研究集会を「文化財と環境」のテーマのもと、6名の外国人研究者を迎えて熱心な討議を展開した。また、スミソニアン研究機構との研究交流も引き続き行われている。

この年度の終わりに当たって、濱田前所長をはじめ数名の職員を定年、転出等で見送ることになったが、当研究所の発展に尽力された諸先輩の御努力に対し敬意と謝意を表する次第である。

平成4年2月

東京国立文化財研究所長

西　川　杏太郎

目 次

I. 沿 革	1
1. 設 立 の 経 緯	1
2. 年代別重要事項	1
3. 歴 代 所 長	5
II. 機 構 ・ 職 員 ・ 予 算	6
1. 機 構	6
2. 職 員	7
3. 名 誉 研 究 員	10
4. 予 算	11
5. 特 別 研 究 一 覧	12
6. 科学研究費補助金交付一覧	12
7. 受 託 研 究 一 覧	13
III. 調 査 研 究	14
中長期研究計画一覧	14
1. 美 術 部	15
(1) 概 要	15
(2) 各 論	16
2. 芸 能 部	20
(1) 概 要	20
(2) 各 論	21

3. 保存科学部	23
(1) 概 要	23
(2) 各 論	24
4. 修復技術部	32
(1) 概 要	32
(2) 各 論	33
5. 情報資料部	42
(1) 概 要	42
(2) 各 論	43
6. アジア文化財保存研究室	48
(1) 概 要	48
(2) 各 論	48
7. 国際調査研究	51
8. 主要研究業績	54
IV. 事 業	71
1. 出 版	71
(1) 美術研究	71
(2) 日本美術年鑑	71
(3) 芸能の科学	72
(4) 保存科学	72
2. 黒田清輝巡回展	72
3. 公開学術講座	73
4. 夏期学術講座	73
5. 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修	74
6. 国際研究集会	76

7. アジア文化財保存セミナー	78
8. 会 議	80
9. 国際・国内交流	82
(1) 職員の海外渡航	82
(2) 招へい研究員	84
(3) 海外研究者の来訪	85
V. 研究施設・設備	86
1. 蔵 書	86
2. 資 料	87
3. 主要機器設備	88
4. 黒田記念室	90
5. 閱 覧 室	90
VI. 関係法規	91

I. 沿革

1. 設立の経緯

東京国立文化財研究所は、昭和27年4月1日発足したが、その前身であり母体となったものは、昭和5年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄附出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原謙二郎及び東京美術学校校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し、また、わが国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2. 年代別重要事項

昭和 元年12月 前記の事業を遂行するため委員会が設備され、東京美術学校校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・同岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建築造営については東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月 美術研究所準備事業を開始した。

同 年10月 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192㎡の建物1棟を起工した（本館）。

同 3年9月 前記の建物が竣工したので、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また、館内に黒田子爵記念室を設け、同子爵の作品

沿革

を陳列した。

同 4年5月 遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。

同 5年6月28日 勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。

同 年10月17日 美術研究所開所式を挙行了した。

同 7年1月 美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物『美術研究』を創刊した。

同 年4月18日 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5か年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。

同 5年5月26日 帝国美術院はこの申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。

同 9年10月18日 毎年10月18日を開所記念日と定めた。

同10年1月28日 鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129㎡の書庫が竣工した。

同 年4月 『日本美術年鑑』の編纂事務を開始した。

同 年6月1日 勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。

同12年6月24日 勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。

同 年11月29日 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。

同13年2月12日 木造、平屋建、延面積97㎡の写真室1棟が竣工した。

同19年8月10日 黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

同20年5月28日 美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同 年7～8月 酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曽根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

- 同21年3月29日 酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。
- 同 年4月4日 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。
- 同 年4月16日 東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。
- 同22年5月1日 美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。
- 国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた。(保存科学部の前身)。昭和23年度より専任の職員を配置し研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室(66㎡)に設けた。
- 同25年8月29日 文化財保護法の制定にともない、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。
- 同 年8月29日 文化財保護委員会事務局設置にともない、保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。
- 同26年1月31日 美術研究所組織規程が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。
- 同27年4月1日 文化財保護法の一部が改正、東京文化財研究所組織規程が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。
- また、文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。
- 同年7月1日 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。
- 同28年4月26日 保存科学部研究室として、東京国立博物館構内の倉庫132㎡を改造のうえ移転した。
- 同29年7月1日 東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となった。
- 同32年3月22日 東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平屋建、8㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。
- 同 年11月30日 従来の2階建書庫のうえにさらに1階を増築3階建とし、増築分延面積71㎡が竣工した。

沿 革

同34年 4月30日 東京国立文化財研究所研究受託規程が定められ、この年度から受託研究が開始された。

同36年 9月16日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、従来の庶務室は庶務課となった。

同37年 3月31日 東京国立博物館構内に保存科学部庁舎（保存科学部実験室）として、鉄筋コンクリート造2階建延面積663㎡の建物1棟が竣工した。

同 年 7月 1日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同 年 7月20日 芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工にともない、旧保存科学部庁舎に移転した。

同43年 6月15日 文部省設置法の一部が改正され、本研究所は文化庁附属機関となった。

同44年 8月23日 保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延1,950.41㎡）の起工式が行われた。

同45年 3月25日 前記の別館が竣工したので、同年5月26日竣工式が行われた。

同 年 3月25日 芸能部は、別館3階に移転した。

同 年 5月 8日 保存科学部は別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を完了した。

同 年 6月29日 保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が完了した。

同 年11月 2日 所長および庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転した。
（本館は、美術部庁舎となる）したがって研究所の所在地表示は「12番53号」が「13番27号」に変更された。

同46年 4月 1日 保存科学部庁舎及び別館の敷地2,658㎡を東京国立博物館から所管換された。

同48年 4月12日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。

同52年 4月18日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、情報資料部の新設により

5部1課となり、情報資料部に文献資料研究室および写真資料研究室が置かれ、美術部資料室は廃止された。

同53年3月20日 本館構内の写場等（木造平屋建延面積144㎡）を取りこわし、情報資料部研究棟として、鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、延面積565.95㎡の建物が竣工した。

同53年4月5日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。

同59年6月28日 文部省組織令が改正され、本研究所は文化庁施設等機関となった。

平成2年10月1日 文部省設置法施行規則の一部が改正されて新たにアジア文化財保存研究室が置かれ、5部1室1課となった。

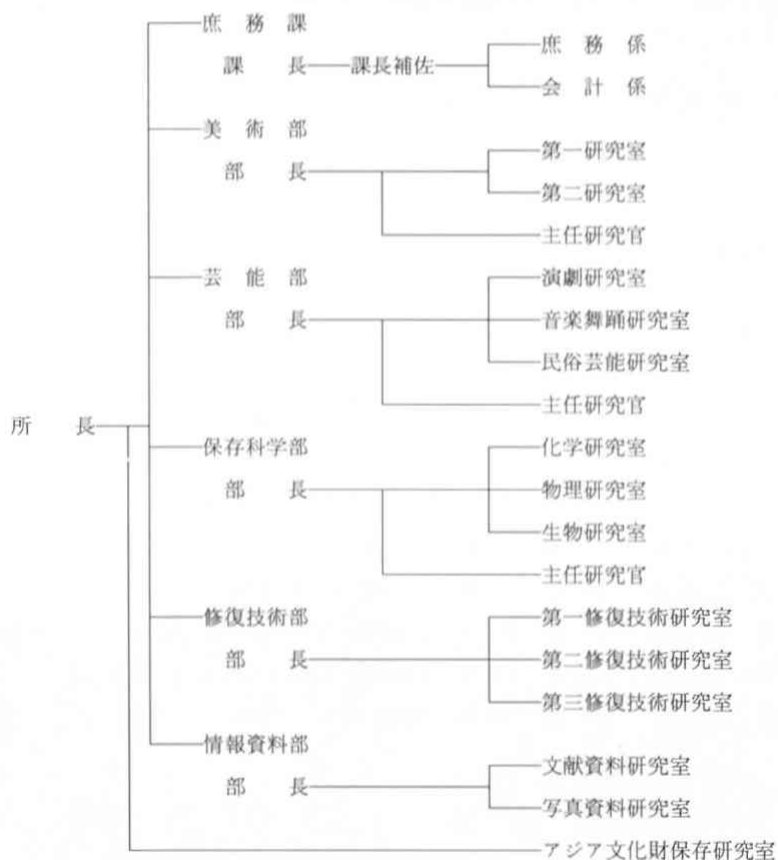
3. 歴代所長（昭和5年～平成3年）

主 事	正 木 直 彦	（昭和 5. 6.28～昭和 6.11.24）
主 事	矢 代 幸 雄	（昭和 6.11.25～昭和10. 5.31）
所長事務取扱	和 田 英 作	（昭和10. 6. 1～昭和11. 6.21）
所 長	矢 代 幸 雄	（昭和11. 6.22～昭和17. 6.28）
所長事務取扱	田 中 豊 蔵	（昭和17. 6.29～昭和22. 8.15）
所 長	田 中 豊 蔵	（昭和22. 8.16～昭和23. 5.10）
所 長 代 理	福 山 敏 男	（昭和23. 5.11～昭和24. 8.30）
所 長	松 本 栄 一	（昭和24. 8.31～昭和27. 3.31）
所長事務代理	矢 代 幸 雄	（昭和27. 4. 1～昭和28.10.31）
所 長	田 中 一 松	（昭和28.11. 1～昭和40. 3.31）
所 長	関 野 克	（昭和40. 4. 1～昭和53. 4. 1）
所 長	伊 藤 延 男	（昭和53. 4. 1～昭和62. 3.31）
所 長	濱 田 隆	（昭和62. 4. 1～平成 3. 3.31）
所 長	西 川 杏太郎	（平成 3. 4. 1～現 在）

Ⅱ．機構・職員・予算

東京国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究，資料の作成およびその公表を行うことを目的として設立された文化庁の施設等機関である。その機構等は次のとおりである。

1. 機 構



2. 職 員

(平成3年3月30日現在)

所 属	職 名	氏 名	
所 属 課	所 長	濱 田 隆	(美術史)
庶 務 係	課 長	最 所 親 志	
	課 長 補 佐	長 谷 川 憲 康	
	係 長	江 原 勉 満	
	庶 務 主 任	大 堀 岳 子	
	事 務 補 佐 員	中 村 節 子	
	"	伊 藤 百 合 子	
	"	白 井 久 美 子	
	技 能 補 佐 員	堺 良 子	
会 計 係	調 査 員(非)	松 原 美 智 子	
	係 長(併)	長 谷 川 憲 康	
	係 員	相 澤 か ず 子	
	"	鈴 木 秀 樹	
	事 務 補 佐 員	志 村 浩 美	
	"	宮 崎 章 子	
	技 能 補 佐 員	遠 田 由 太 郎	
	勞 務 補 佐 員	菊 地 廣 吉	
美 術 部	部 長	関 口 正 之	(日本仏教絵画史)
第 一 研 究 室	主 任 研 究 官	鈴 木 廣 之	(日本近世絵画史)
	室 長	三 宅 久 雄	(日本彫刻史)
	研 究 員	井 上 一 稔	(日本彫刻史)
	調 査 研 究 員(非)	佐 野 み どり	(絵巻)
第 二 研 究 室	室 長	三 輪 英 夫	(日本近代絵画史)
	研 究 員	佐 藤 道 信	(日本近代絵画史)
	"	山 梨 絵 美 子	(日本近代絵画史)
芸 能 部	部 長	佐 藤 道 子	(寺院芸能)
	主 任 研 究 官	鎌 倉 恵 子	(日本近世演劇)
演 劇 研 究 室	室 長	羽 田 昶	(日本中世演劇)
	調 査 研 究 員(非)	高 橋 美 都	(日本音楽史)
音 楽 舞 踊 研 究 室	室 長	蒲 生 郷 昭	(日本音楽史)
	調 査 研 究 員(非)	丸 茂 美 恵 子	(舞踊学)
民 俗 芸 能 研 究 室	室 長	中 村 茂 子	(民俗芸能)
	調 査 研 究 員(非)	三 村 昌 義	(芸能史)

機構・職員・予算

所 属	職 名	氏 名	
保 存 科 学 部	部 長	馬 淵 久 夫	(同位体化学)
	主 任 研 究 官	門 倉 武 夫	(分析化学)
	主 任 研 究 官	石 川 陸 郎	(物理光学)
	化 学 研 究 室	室 長 平 尾 良 光	(無機化学)
	物 理 研 究 室	室 長 三 浦 定 俊	(計測工学)
	研 究 員	佐 野 千 絵	(光化学)
	生 物 研 究 室	室 長 新 井 英 夫	(微生物学)
	調 査 研 究 員 (非)	山 野 勝 次	(応用昆虫学)
	修 復 技 術 部	部 長 三 輪 嘉 六 克	(考古学)
	第 一 修 復 技 術 研 究 室	室 長 中 里 壽 克	(日本工芸史)
修 復 技 術 部	第 二 修 復 技 術 研 究 室	室 長 増 田 勝 彦	(日本工芸史)
	研 究 員	川 野 邊 渉	(高分子工学)
	第 三 修 復 技 術 研 究 室	室 長 青 木 繁 夫	(考古学)
	技 術 補 佐 員	犬 竹 和	
	情 報 資 料 部	部 長 鶴 田 武 良	(中国絵画史)
	文 献 資 料 研 究 室	室 長 米 倉 迪 夫	(日本中世絵画史)
	研 究 員	島 尾 新	(日本中世絵画史)
	写 真 資 料 研 究 室	室 長 事 務 取 扱 鶴 田 武 良	
	研 究 員	井 手 誠 之 輔	(東洋絵画史)
	"	長 岡 龍 作	(日本彫刻史)
情 報 資 料 部	専 門 職 員	橋 本 弘 次	(美術写真)
	"	市 川 和 正	(")
	"	野 久 保 昌 良	(")
	ア ジ ア 文 化 財 保 存 研 究 室	室 長 西 浦 忠 輝	(材質改良学)
	研 究 員	朽 津 信 明	(地質学)
	客 員 研 究 員	野 津 憲 治	(地球化学)
	"	金 子 克 美	(表面化学)

平成2年度における退職者

所 属	官 職 名	氏 名	在 職 期 間	備 考
庶務課 情報資料部	所 長	濱 田 隆	62.4. 1～平3.3.31	退 職
	技 能 補 佐 員	遠 田 由太郎	62.5. 6～平3.3.30	"
	専 門 職 員	橋 本 弘 次	21.6.15～平3.3.31	"

3. 名誉研究員

氏 名	退 職 時 官 職 名	在 職 期 間	名誉研究員 発令年月日
白 畑 よ し		5. 6.30~27. 8. 1	53.10.18
福 山 敏 男	美 術 部 長	23. 5.11~34. 4.15	"
高 田 修	"	27.12. 1~44. 3.31	"
登 石 健 三	保 存 科 学 部 長	27.10. 1~50. 4. 1	"
岡 畏 三郎	美 術 部 長	20. 5.15~51. 4. 1	"
中 村 傳三郎	美 術 部 第 二 研 究 室 長	22.10. 1~53. 4. 1	"
関 野 克 所	長	40. 4. 1~53. 4. 1	"
秋 山 光 和	美 術 部 第 一 研 究 室 長	16.10. 1~42. 2. 1	54.10.18
久 野 健	情 報 資 料 部 長	20. 5.31~57. 4. 1	57.10.18
川 上 湮	美 術 部 長	21. 2.28~57. 4. 1	"
関 千 代	美 術 部 第 二 研 究 室 長	18.12.15~58. 4. 1	58.10.18
横 道 萬里雄	芸 能 部 長	28. 3.16~51. 4. 1	59.10.18
上 野 ア キ	情報資料部文献資料研究室長	17.11. 3~59. 4. 1	"
江 上 綏	情報資料部主任研究官	38. 5.18~59. 3.31	"
田 村 悦 子	美 術 部 主 任 研 究 官	22. 6.16~60. 3.31	60.10.18
猪 川 和 子	情報資料部文献資料研究室長	22. 6.27~60. 3.31	"
伊 藤 延 男	所 長	53. 4. 1~62. 3.31	62.10.18
柳 沢 孝	美 術 部 長	27. 4. 1~62. 3.31	"
江 本 義 理	保 存 科 学 部 長	27. 4. 1~62. 3.31	"
宮 次 男	情 報 資 料 部 長	30. 9. 1~62. 3.31	"
三 隅 治 雄	芸 能 部 長	27.10. 1~63. 3.31	63.10.18
樋 口 清 治	修 復 技 術 部 長	37.11. 1~63. 3.31	"
田 實 榮 子	美 術 部 主 任 研 究 官	23. 3.31~ 1. 3.31	1.10.18
見 城 敏 子	保存科学部物理研究室長	34. 4. 1~ 1. 3.31	"

4. 平成2年度予算

() は補正後を表す

事	項	金 額
人件費		325,665
運営費		(142,575) 147,626
事業管理		(32,736) 34,233
一般研究		(39,563) 40,982
特別研究		(61,657) 63,647
受託研究		(2,354) 2,354
文化財保護に関する国際交流		(6,265) 6,410
文化財保存修復に関する研究のための国際研究集会		3,079
招へい研究員		2,979
ローマセンター資料収集提供		352
文部省		
各所修繕		3,457
在外研究員旅費		3,312
計		(475,009) 480,060

5. 平成2年度特別研究一覧

事 項	金 額
	千円
文化財の伝統的保存修復材料に関する研究	4,387
敦煌文化財保存修復に関する調査研究	30,212
日本近代美術の発展に関する明治後半期の基礎資料集成	1,948
仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究	2,654
アジア文化財保存修復協力センター（仮称）設置のため調査	3,058
スミソニアン研究機構との国際研究交流	3,760
有形・無形文化財研究支援データベースシステムの構築に関する調査研究	2,628
研究用機器整備（電子スピン共鳴装置）	15,000
計	63,647

6. 平成2年度科学研究費補助金交付一覧

種 別	課 題 名	研究代表者	交 付 額
			千円
総合研究(A)	美術史研究における基礎資料の共有化とデータベースの活用	米 倉 迪 夫	3,000
一般研究(A)	日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究	関 口 正 之	3,000
一般研究(B)	石質遺跡の新しい保存技術の開発に関する研究	西 浦 忠 輝	800
奨励研究(A)	瑞溪周鳳をめぐる絵画世界	島 尾 新	800
"	文化財修復材料としての合成高分子の評価法と改良に関する研究—アクリル樹脂を例として—	川 野 邊 渉	1,000
試験研究(B)	プラズマ法による出土金属遺物の保存修復研究	青 木 繁 夫	2,700
国際学術研究	中国砂漠地帯における文化財保存のための自然環境に関する共同研究	三 輪 嘉 六	2,400
"	東アジア地域の古文化財（青銅器および土器・陶磁器）の保存科学的研究	濱 田 隆	5,500
計			19,200

7. 平成2年度受託研究一覧

研 究 課 題	受 入 額
史跡・称名寺境内庭園木橋の塗装劣化防止の研究	230,384
トルコ、カマン・カレホユック遺跡出土金属製品の調査研究	575,960
一宮神社七星剣の保存修復研究	392,700
風邪引き紙の保存研究	589,050
隈・西小田地区遺跡出土銅鏡・銅戈の保存修復研究	602,140
舟塚古墳出土金属製品の保存修復研究調査	691,152
計	3,081,386

円

Ⅲ 調査研究

中長期研究計画一覧

部 名	課 題 名	研究代表者	期 間
美 術 部	日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流	関 口 正 之	昭63. 4 ～平 3. 3
	美術における地域性及び社会性の研究	三 宅 久 雄	平 1. 4 ～平 6. 3
	美術に関する基礎資料の研究－絵巻資料、明治後半期美術資料及び関東所在水墨画資料を中心として－	三 輪 英 夫	"
芸 能 部	仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究	佐 藤 道 子	昭63. 4 ～平 5. 3
	寺院行事の研究	"	昭60. 4 ～平 4. 3
	能楽の芸能学的調査研究	羽 田 昶	平 2. 4 ～平 7. 3
	日本音楽各種目の独自性と相互影響の研究	蒲 生 郷 昭	平 1. 4 ～平 6. 3
	採り物の研究	中 村 茂 子	昭61. 4 ～平 5. 3
保存科学部	有機質文化財の光による劣化の定量的評価法の確立	三 浦 定 俊	平 1. 4 ～平 7. 3
	特殊環境に置かれた文化財の保存条件の検討	石 川 陸 郎	平 1. 4 ～平 9. 3
	フォクシングの保存科学的研究	新 井 英 夫	平 1. 4 ～平 5. 3
修復技術部	文化財の伝統的修復材料の研究（第1期）	三 輪 嘉 六	平 1. 4 ～平 5. 3
	屋外文化財の劣化過程の調査と修復法の開発	中 里 壽 克	平 1. 4 ～平 6. 3
情報資料部	美術情報処理システムの研究－データの共有化を中心として－	鶴 田 武 良	平 1. 4 ～平11. 3
	美術史における画像処理技術の応用に関する基礎的研究	島 尾 新	平 1. 4 ～平 6. 3
	日本・東洋美術史文献データベースの開発	米 倉 迪 夫	昭63. 4 ～平 6. 3

1. 美術部

(1) 概要

美術部は日本・東洋の古美術並びに日本の近代・現代美術とこれらに関連ある西洋美術についての基礎的調査研究を行い、かつその成果を公表することを目的としている。美術部は二室より構成され、第一研究室は古美術を担当し、第二研究室は近代・現代美術を担当している。

研究調査は各時代にわたり絵画・彫刻・工芸の各部門について、作品と文献資料との両面から実証的に進められており、ともに基礎となる研究資料の作成と整理とに努めている他、現代美術の動向に関する調査と資料収集をも平行して行っている。また、作品に関し、早くから実施してきた科学的な鑑識法を積極的に活用しているのも当部の特色である。さらに情報資料部員とは研究や調査の面で緊密な協力が行われている。昭和63年度から3年計画で始まった情報資料部と共同の特別研究「日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究」は平成2年度をもって調査と関係資料の収集を終え、研究成果をまとめた。第二研究室では、昭和63年度より特別研究「日本近代美術の発達に関する明治後半期の基礎資料集成」を4か年計画で開始し、新たに資料収集と研究調査を進めている。そのほか他機関との共同研究による広領域の研究にも参加している。なお、研究員それぞれの研究課題と内容は(2)研究調査活動の項に示すとおりである。

研究調査の結果は、第一研究室全員が編集担当する機関誌『美術研究』（昭和7年創刊）やその他の学会誌に発表し、また、第二研究室を中心とする『日本美術年鑑』（昭和11年創刊）を発行しており、単行の研究報告も随時刊行している。さらにそのほか情報資料部との共同で、研究成果の一部を広く一般の理解に資するために毎年一回公開学術講座を開催している。なお、黒田清輝の遺産に基づいて創立された美術研究所、現美術部は黒田清輝の作品その他関係資料を保管し、その多くを陳列する黒田記念室は毎週一回木曜日の午後公開している。

調査研究

第一研究室

日本及び東洋諸地域の古美術について、各研究員が専門とする領域と時代を中心に調査研究を進め、主要問題を捉えた共同研究を行い、常に精密な基礎資料の収集に努めている。なお、第一研究室の研究員は『美術研究』の編集業務を担当している。

第二研究室

明治以降の日本近代美術に関する調査研究と、これに関連する西洋美術及び日本近世の洋風美術の調査研究、並びに現代美術の動向に関する資料の収集と調査とを継続して行っている。また昭和63年度より4か年計画で特別研究「日本近代美術の発達に関する明治後半期の資料集成」を開始し、第3年度の研究調査を行った。とくに現代美術に関する調査研究においては、その年度に収集した資料を整理し、その成果を『日本美術年鑑』として毎年公刊している。平成2年度は、平成元年の内容をもった平成2年版を刊行し、引き続き平成3年版の編集に着手した。

また、昭和52年度以降実施してきた黒田清輝巡回展は当研究室が中心となって行っており、平成2年度は八戸市美術館で開催した。

(2) 各 論

1. 美術における地域性及び社会性の研究（5年計画の第2年次）

(1) 京・近江地方所在の天台系彫刻

本年度は、直接京・近江に所在する作品の調査は行わず、大阪・奈良に所在し本テーマに関係のある次の二作品を調査した。一つは、大阪・長円寺十一面観音立像、一つは奈良・西大寺如意輪観音坐像（二臂）である。前者では、その図像的側面から、天台との関わりを考え、後者では近江・石山寺像に倣う作例として考察した。

＜三宅、井上、（情）長岡＞

(2) 外来の視覚情報の伝播経路とその発展の地域的差異

芸術家の社会的地位

15・16世紀における絵画マーケット

ここでは、美術の伝播の様態を作者と享受者の双方の視点に立って眺めるもので、テーマのうち上二者について“雪舟イメージ”が形成されてゆく過程の追求と、山口

美術部

地方における大内文化を担う作品に関する基礎資料収集を継続した。また、将来された寧波仏画と高麗仏画について調査を行い、基礎資料を収集した。

絵画マーケットについては、贈与論的立場から15世紀の日記資料等に現われる美術品の贈答・授受に関する記事の収集につとめた。また、絵画等の売買値段、制作費用に関する資料の収集を始めた。＜鈴木、(情) 島尾、(情) 井手＞

(3) 日本の洋風表現

幕末から明治初年における洋風表現の受容形式について、京都(田村宗立他)と江戸(東京)、横浜(五姓田芳柳他)との異同を、写真の介在を含めて具体的に比較検討した。＜三輪、佐藤、山梨＞

(4) 中国の美術運動

主として上海で行われた美術展覧会関係資料の調査を行った。＜(情) 鶴田＞

2. 美術に関する基礎資料の研究

(1) 絵巻資料

梅津次郎氏収集絵巻資料の点検。

寄贈された資料は、

- ① 絵巻関係ネガ・フィルムと撮影台帳
 - ② 作品別焼付け写真
 - ③ 作品別資料ファイル
- の三つに大別する。

- 1) 本年度は、ネガフィルム(約400本)のうち、172本(35ミリ判 156本、6×6判 16本)について密着写真を作成した。
- 2) 撮影台帳のデータ化も同時に進めているが、今年度は昭和39年までの撮影分、800件の入力を済ませた。
- 3) 昨年五月に「仏教説話画」に関する討論会を開催した。

＜(情) 米倉、(調) 佐野、(共同研究員) 村重寧、大西昌子、千野香織＞

(2) 関東所在水墨画資料

下記的美術館・博物館・寺院に於て、室町水墨画及び関連作品の調査を実施した。

- 1) 茨城県立歴史館(同館及び板橋区立美術館所蔵作品)
- 2) 茨城県正宗寺

調査研究

3)箱根早雲寺・正眼寺

4)静岡県立美術館

調査・研究の成果は、美術史学会東支部例会（七月 於多摩美術大学）において、次のとおり報告した。

1)調査作品百数十点の基礎データをデータベース化し、プリントアウトに作品写真のコピーを付して参加者に配布した。収録したのは、神奈川県立博物館・茨城県立歴史館・栃木県立博物館・板橋区立美術館・正宗寺・岡山県立美術館の所蔵品である。

2)横田忠司は、中世の諸史料に見える関東画壇関係の記事を収集し、関東に於ける絵画状況についての研究成果を報告した。

3)大石利雄は、逸伝画家官南について作品及び文献史料を収集し、その室町絵画史における位置づけを試みた。

＜(情)鳥尾、(情)井手、(共同研究員)河合正朝、横田忠司、相沢正彦、
大石利雄、山下祐二、小川知二、坂口薫＞

(3) 明治後半期美術史料

1) 明治期の美術雑誌目次の集成

「絵画叢誌」、「日本美術協会報告」、「日本美術」、「書画骨董雑誌」、「研精画誌」、「美術之日本」等10件、約500冊の目次を収集整理した。明治期美術雑誌の内およそ三分の一程度を調査し得たが、研究上で重要度の高いものは大体収集することができた。

2) 年表史料の収集・整理

美術雑誌、著作物、美術団体史などに掲載された明治後半期美術に関する年表を収集・整理した。

＜三輪、佐藤、山梨＞

3. 特別研究「日本近代美術の発達に関する明治後半期基礎資料集成」

(4か年計画の3年次)

本研究は、明治20年代以降の日本近代美術の発達に関する基礎資料、特に内外の博覧会及び美術展覧会を対象に、文献資料の収集と作品の調査研究を行うものである。

第3年度は、下記の調査研究を行った。

(1) 内外の博覧会の概要を把握するため、それらに関する文献の作成を行い、中間報告として「内国勸業博覧会・万国博覧会関係文献所在目録」（美術研究348）を出し

た。

(2) 兵庫県立近代美術館主催の企画展「日本美術の十九世紀」に出品された、第1, 2回内国勲業博覧回写真帖をはじめ個人所蔵の関連資料を調査し、写真撮影を行い、これらを収集、整理した。

(3) 東京国立博物館蔵の内国勲業博覧会(第1-5回)及びウィーン万国博覧会等、旧博物局所蔵の内外博覧会事務報告書を中心とする関連文献資料を調査し、目録を作成した。
 <三輪, 佐藤, 山梨>

4. 科学研究費補助金による研究「日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究」(一般研究(A)研究代表者 関口正之, 3カ年計画の第3年次)

絵画・彫刻・工芸各分野の様々な側面での密接な関係が、その史的展開に大きく反映されていることは、日本における美術のあり方を端的に示す重要な特色のひとつといえる。こうした特色は、従来指摘されながらも、具体例に即した総合的な解明は試みられていない。本研究は、モチーフの問題を各分野の接点に据え、絵画・彫刻・工芸各分野における共通のモチーフを取り上げて相互に比較検討を加え、その史的展開を明らかにすることを目的とする。最終年度にあたり、関連史料の調査収集を進めるとともに各個のテーマの集中化を図り、時代・分野を通して総合的に討議しながら研究のまとめを行った。

(1) 古代中世第一班は仏教美術について、絵画では仏伝図・仏涅槃図など仏伝表現における変容をモチーフの整理によって検討し、彫刻ではこれまで収集してきた鎌倉時代に至る阿弥陀如来の来迎像の現存作品、関連記録を整理し、彫刻における来迎表現が来迎図と緊密な関連をもちながら、しかも如何に三次元独自の表現を加味しながら展開していったかを考察した。(今年度調査作品 大阪・四天王寺, 京都国立博物館, 京都・常照皇寺, 和歌山・光台院, 栃木・地藏院, 愛媛・宗光寺の各阿弥陀三尊像)

(2) 古代中世第二班は肖像画・伝記絵、扇面画をとりあげた。肖像画に関しては早雲寺蔵北条早雲像, 京都国立博物館の高僧画像などを調査し、中世の祖師像が顔の表現以外は大陸の祖師像を手本として図像的骨格を作り上げていることを明らかにし得た。米倉は肖像画研究における問題点を「鎌倉時代肖像画素描」として発表(第24回

調査研究

美術部・情報資料部公開学術講座)した。

扇面画研究については、工芸研究と協力して東京国立博物館蔵扇面散らし時絵手筈、MOA美術館蔵山水図時絵手筈を調査し、モチーフの伝播に関する研究資料を収集したほか、日本においては珍しい画題の作品(三教合面図 紙本墨画淡彩 個人蔵)を調査した。

(3) 近世近代班のうち、近世については、宗達作品のうえ源氏物語を主題とする作例のモチーフの典拠を源氏物語の古注釈書と比較し、その源泉を明らかにした。また、室町時代後期から近世初頭にかけての瀟湘八景図をとりあげ、モチーフの選択と画面上での配置を八景主題の詩歌・連歌と比較し、両者の間の対応関係を検討し、その結果を科学研究費報告書に発表した。近代については、黒田清輝作品の主題とモチーフに関し西洋文学との関連、「昔語り」を中心とした群像モチーフの源泉等を明らかにし、また、美術行政と工芸意匠、および意匠、デザインとしての明治初期絵画の殖産興業的位置づけについて研究し、その成果を科学研究費報告書並びに「美術研究」に発表した。

研究分担者は美術部・情報資料部の研究員全員と修復技術部第一修復技術研究室長中里壽克、東京芸術大学美術部教授中野政樹を加えた14名である。

2. 芸 能 部

(1) 概 要

芸能部は、日本の伝統芸能に資するために必要な基礎研究を行うことを目的とし、演劇研究室・音楽舞踊研究室・民俗芸能研究室の三室によって構成されている。芸能部の研究目標としては、諸芸能の理念・構造・技法およびその継承保存に関する研究などがあり、その研究に必要な資料の収集・整備、および記録の作成のための撮影・録音・録画などの作業を行う。また、研究の成果は刊行・夏期学術講座・公開学術講座などによって公表する。

平成2年度は、特別研究「仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究」(4年計画)の第3年次にあたり、前年に引き続き部をあげて調査研究を行った。

演劇研究室

日本の伝統演劇について芸能学的に調査・研究を行い、また、これら諸芸能の周辺にあつて、伝統芸能の成立に深い関係をもつ諸分野についても調査研究を進めている。

平成2年度は、個人研究として「寺院行事の研究」「絵画資料による近世演劇の研究」、共同研究として「能楽の芸能学的調査研究」を行い、また共同研究「仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究」に参加した。なお、「寺院行事の研究」では、過去20年にわたって調査・記録を行った録音資料に基づいて、諸宗派の悔過法要形式の比較分析を行い、これと並行して、前記資料の永久保存のためのPCMダビングの作業を実施している。

音楽舞踊研究室

日本の音楽と舞踊について、芸能学的・音楽学的・舞踊学的な調査研究を行い、これら伝統芸能の成立に深い関係をもつ周辺分野についても、調査研究を進めている。

平成2年度は、個人研究として、「日本音楽各種目の独自性と相互影響の研究」「日本舞踊における技法の相互影響の研究」を行ったほか、共同研究「仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究」に参加した。

民俗芸能研究室

全国各地に分布伝承される民俗芸能を対象とし、それらの保存・継承に資するために必要な研究を行っている。

平成2年度は、個人研究として「民俗芸能における採り物の研究」「上方落語の研究」、共同研究として「民謡の研究」を行い、「仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究」に参加した。

(2) 各 論

1. 仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究（4年計画の第3年次）

わが国の伝統的な行事や芸能が、仏教との関わりの中に展開してきた様相を具体的に解明し、文化史的・芸能史的位置づけを行うことを目的とし、研究対象として“延年”を取り上げている。

調査研究

本年度はその第3年次であるが、昨年度に引き続いて“延年”の実態把握を主眼としながら、下記の調査・研究を行った。

- A. 伝存事例の中で古態を伝えていると思われるものの実地調査；白山神社「小迫の延年」・岩戸寺「修正鬼会」の、録音・VTR録画・写真撮影等。
- B. 修験系の伝承事例と伝えられるものの実地調査；山形県八幡神社「安久津の延年」のVTR録画・写真撮影等
- C. 関連資料の調査；醍醐寺「年中行事関係史料」の調査撮影
- D. 研究会開催；研究発表「延年の音楽」

2. 能楽の芸能学的調査研究（5年計画の第1年次）

舞台芸術としての能楽の技法を多角的に捉えることを目的とし、今年度は下記の調査研究を行った。

- A. 能の囃子事について数年来行ってきた分析の結果を『能の囃子事』として刊行した。
- B. 仏教行事における論義と能の小段のロンギのかかわりについて、基礎データのカード化を行った。
- C. 金春流板間家蔵の明治初期文書を閲読し、その資料的意義を考察した。
- D. 外国人による能楽研究の実状について資料と情報を収集した。

3. 寺院行事の研究（6年計画の第5年次）

寺院行事が内包する多種多様な要素の中から芸能的要素を抽出し、各宗派にわたる調査研究を行い、その変遷・分化をあとづけようとする。本年度は悔過法要の詞章を本尊別に分析してその展開を追い、その成果を「芸能の科学 19」に公表して完結させる。なお、僻地に伝存する悔過会の中、奈良県山間部一野迫川村一の「おこない」について実地調査を行い、南九州一帯の悔過会伝存状況の調査を行った。（佐藤）

また、醍醐寺所蔵史料の調査研究に参加し、現在は伝承の絶えている同寺の悔過会が盛行していた時期と、法要の構成についての検討を行った。（高橋）

4. 絵画資料による近世演劇の研究

近世風俗画及び絵入り浄瑠璃本・絵入り狂言本の挿絵から当時の舞台の様相・観客および読者の要求を検討する。今年度は、特に風俗画を比較検討し、いわゆる絵空事の部分とそうでない部分とを検討する。（鎌倉）

5. 日本音楽各種目の独自性と相互影響の研究（5年計画の第2年次）

本年度は、催馬楽、平曲、新内節をとりあげた。催馬楽については、古楽譜を収集し、楽譜資料ごと、曲ごとの記載事項等を整理した。平曲については、曲節名と他種目の理論用語との関係を考察した。新内節については、前年度に得られた「蘭蝶」のメログラフチャートと詞章との対応関係を分析した。（蒲生）

6. 民俗芸能における採り物の研究（7年計画の第5年次）

民俗芸能を総合的な視野で把握することを目的とする。そのために、各種目の構造・技法分析の一環として、各種芸能にさまざまな形で用いられている採り物―特に扇―の意義・種類・技法などに関する分析結果を、夏期学術講座において発表した。（中村）

7. 日本舞踊における技法の相互影響の研究

こんにち演じられることの少ない舞踊作品にみられる“振り”をもとにして、技法の変遷や伝承の背景を考察している。本年度、その成果の一部を芸能部公開学術講座において発表した。（丸茂）

8. 民謡歌詞の様式研究

全国的な民謡歌詞調査結果に基づき、近畿地方の歌詞カードの作成を進めた。（中村・三村）

9. 上方落語の研究

「忠臣蔵」に受容された落語の分類を行い、その成果の一部を芸能部公開学術講座において発表した。（三村）

3. 保存科学部

(1) 概要

文化財の材質・構造・劣化に関する科学的研究ならびに文化財を取り巻く環境の研究を行っている。研究成果は修復技術部と共同編集の機関誌「保存科学」により公表され、文化財の指定・保存対策・修復処置の基礎資料として役立てられている。研究組織は化学研究室、物理研究室、生物研究室の3室からなり、平成元年度より東京大学理学部 野津憲治助教授 が客員研究員（併任）として研究に加わっている。

調査研究

化学研究室

化学研究室では文化財の材質及び保存に関する問題点を化学的手法を用いて調査・研究している。X線分析法，光学的分析，質量分析法などを用い，主として金属文化財に関する劣化，保存対策，材料産地などの問題について研究を進めている。

物理研究室

物理研究室では文化財の材質及び保存に関する問題点を物理的手法を用いて調査・研究している。文化財の材質，構造を調査する方法として γ 線・X線・紫外線・赤外線などを用いている。また展示，収蔵，梱包などの文化財を保存する環境の評価と劣化防止の方法について研究を行っている。

生物研究室

生物研究室では文化財の保存に関する問題点を生物学的な見地から調査・研究している。文化財の生物による劣化，すなわち微生物や昆虫等による被害の実態調査，そしてこれら加害生物による劣化の機構を明らかにし，加害生物防除法の研究と開発を行っている。

(2) 各 論

1. 有機質文化財の光による劣化の定量的評価法の確立（6年計画の第2年次）

昨年度に引続き，紫外線照射（短波長，長波長），オゾン曝露，電子線照射などで強制劣化させた絹について，紫外可視分光，赤外分光，核磁気共鳴，化学発光などの状態分析を行い，走査電子顕微鏡を用いた外見上の変化の観察，破断試験による強度の変化の調査などを行った。結果は昨年度行った予備研究の結果を裏付けられるもので，紫外線照射による絹の光劣化は絹繊維の主要部であるフィブロインの非結晶領域や，フィブロインを取り巻くセリシンに含まれる芳香族アミノ酸に主として起きている。また，江戸時代の絹の紫外可視吸収スペクトルをしらべたところ，新しい絹にくらべて芳香族アミノ酸の特性吸収の強度が低下していて，経年変化と強制劣化との間に相関があることがわかった。

2. 特殊環境に置かれた文化財の保存条件の検討（8年計画の第2年次）

新設の博物館館内は、コンクリート中からのアルカリ性物質を含んだ水分が多量に蒸発してくる。このアルカリ因子が実際にどの程度の影響を与えるのか、曝露実験を行った。

フィールドとしては、滋賀県栗東歴史博物館内の空調機の設備されていない部屋で行った。設置時期は平成2年7月13日である。試料として浮世絵版画に用いられている絵具、絵絹、顔料、銅板、鉄板等を用いた。約半年の中間測定では、版画の絵具のうち、青と黄色の部分が明らかに影響を受けていることが肉眼で認められた。

3. フォクシングの保存科学的研究（4年計画の第2年次）

フォクシング部位成分のなかでも特徴的に存在する成分を供試して、これらの成分がどのような組合せでどのような環境条件のとき、フォクシングを形成するかについて検討した。その結果、グルコースとγ-アミノ酪酸、オルニチン、β-アラニン、グリシン、セリンのそれぞれを麻紙上に組み合わせてスポットし、相対湿度75～84%、温度25～30℃に約40日間保ったとき、フォクシングが形成されることを実験的に証明した。

4. 文化財の材質・構造・技法に関する研究

(1) 分析手法

a. 銅-スズ-鉛合金の定量分析法の確立

既知濃度の銅-スズ-鉛合金を測定し、蛍光X線強度と濃度との関係式を求めた。この研究により、銅-スズ-鉛合金の3成分に関する定量が可能となり、またスズが高濃度になると定量性がなくなる事がわかった。（平尾）

(2) 木造文化財

a. 東大寺仁王像の刻苧漆・彩色下地の調査研究

刻苧漆中の繊維を分析した結果、3cmにもおよぶ麻を用いていることがわかった。また、彩色下地に用いられた砥の粉のサイズや砥の粉層の厚さを計測し、修復材料選定の参考に供した。（佐野）

b. X線透視撮影による調査研究

所蔵者の依頼により、国宝中尊寺金色堂旧巻柱の撮影と調査を行った。

（石川）

c. 出土水浸木材の保存処置方法の研究

調査研究

檜, 松, 銀杏など各種の材の木口, 柁目などでの保存処理薬剤の注入の度合いを観察し, 保存処置方法の良否を検討した。(佐野)

(3) 絵画・顔料

a. 赤外線, エミシオグラフィ及びX線透視撮影による研究

所蔵者の依頼により, 下記の作品の撮影と調査を行った。

①ファン・ダイク作(伝)「リナルドとアルミーダ」(個人所蔵)

②小出楯重作「少年像」(東京国立近代美術館蔵) (三浦)

b. 下地の分析

骨が混入されたといわれている経櫃(千葉県)の下地を分析した。EPMA, X線回折の結果, 骨の存在は立証されなかった。

江戸末期, 明治初期の白色下地の分析をおこない, 貝胡粉およびペンキ材のタンホホワイトなどを検出した。

c. 中国の絵画材料の分析

中国で模写の際使用される絵画材料についてEPMAを用いて分析し, その粒度や含まれている微量元素等を明らかにした。(佐野)

(4) 金属文化財

a. 銅製品, 青銅製品の材料産地推定

各地教育委員会, 発掘事務所, 埋蔵文化財センターなどから, 各種の青銅製品, 古墳出土の銅製品, 伝世の仏像などに関して鉛同位体比測定への依頼があり, 材料産地の推定を行った。(平尾)

b. 熊本江田船山古墳出土品の調査

銅鏡, 銀製品などを蛍光X線分析し, 化学組成に関する情報を得た。(平尾)

c. 法隆寺四十八体仏の材質調査

昨年までで一回目の蛍光X線測定が終ったが, 化学組成に関する情報が不足の資料もあった。これらを再測定し, 関連金銅仏の測定も加えた。考察は今後行う予定である。(一部, 法隆寺館との共同研究) (平尾)

d. 鍍金資料の測定

昨年度に引続き, 蛍光X線分析を行い, 鍍金に関する情報を得た。鍍金の厚さと金の蛍光X線強度との関係, 水銀の残量について検討中である。(平尾)

金層の厚みや表面の状態等が鍍金方法（消し鍍金，箔鍍金）によりどのように変わるか研究し，水銀を蒸発させる際に生じたと考えられる穴の分布に差を認めた。（佐野）

e. 銅・青銅製品の分析

東京国立博物館，全国教育委員会，発掘事務所からの依頼で，貨幣，仏像，鏡，鐵など約50点を蛍光X線分析法で分析した。（平尾）

f. X線透視撮影による調査研究

所蔵者の依頼により，人馬彩畫鏡（東京国立博物館蔵）の撮影と調査を行った。（三浦）

g. 限・西小田地区遺跡出土銅鏡，銅戈の保存修復の研究

福岡県筑紫野市出土の銅戈の鉛同位体比を分析した。資料は幾つかの断片に分かれていたが，それらの関連性がはっきりした。また資料の鉛の産地として中国北部産の鉛を利用している場合と，朝鮮産の鉛を利用している場合，そして明らかに混合していると判断される場合があった。（平尾，受託）

h. トルコ，カマン・カレホユック遺跡出土金属製品の調査研究

トルコ共和国カマン・カレホユック遺跡出土の銅製品約50資料について，化学組成と鉛同位体比を分析し，材料の産地に関する情報を得た。これによると紀元前18世紀から12世紀までのヒッタイト時代には純銅製の銅器を利用しており，青銅はなかった。また銅の産地は遺跡の南約300kmにあるタウルス山脈と推定される。紀元前8世紀から4世紀までのフリギア時代には青銅製品が現われ，銅の産地も複数になった事が認められる。（平尾，受託）

5. 材質の劣化に関する研究

(1) 紙質文化財

a. 和紙の劣化に関する研究

風邪引き紙の表面の分析を行ったが，特定元素の濃縮や微粒子の沈着などは検出されなかった。また，風邪引き部の特定の為に，硫酸銅などによる染色を行い，その分布について検討した。詳細に検討すると，風邪引き部の出現のしかたは3種類あることが明かとなった。（新井，佐野）

高温，低湿度下で強制劣化された和紙に発生した黒点の発生原因を調べたとこ

調査研究

ろ、焦げて断裂していることがわかった。

(佐野)

(2) 染織文化財・染料

a. 絹の劣化の研究

絹の劣化度を定量的に判断する分析手法の検討を継続中であるが、化学発光法、紫外可視分光法、および電子スピン共鳴法の3手法が有効であることがわかった。

高湿度下でオゾン曝露し人工劣化させた絹の表面に結晶生成が認められ、劣化方法の改良が必要であることがわかった。

(佐野)

(3) 絵画・顔料

a. 油彩画の劣化とその原因究明に関する研究

前年度に引続き、油彩画に発生した結晶について非破壊式蛍光X線分析、X線回折法によりその組成の同定を行った。本年度は7点について測定した結果、結晶の主な成分として硫酸亜鉛が検出された。これは下地顔料、絵具に要因があると予想される。しかし、亜鉛化合物以外の結晶（硫酸カルシウムなど）も検出されているため、他にも結晶生成の要因があると考えられる。

(門倉)

(4) 金属文化財

a. 青銅鏝の研究

修復技術部と共同により出土遺物および脱塩処理作業における陰イオンの挙動をイオンクロマトグラフィーにより測定した。

(門倉)

b. 出土青銅遺物中のスズの原子価状態の研究

メスbauer分光法およびX線回折を用いて、出土青銅遺物中のスズの原子価状態を分析したところ、マラカイト層、 Cu_2O 層中でともにスズは4価であり、分析した時点ですでに完全に酸化を受けていることが明かとなった。

(佐野、朽津)

(5) 石造文化財の調査研究

a. 元箱根石仏群の保存

箱根町の依頼により元箱根石仏群の劣化状況の調査を行い、今後の保存対策について提言を行った。予備的な調査により、岩体に生じている亀裂、劣化による石の空隙率の増加と強度の低下、冬期の月平均気温が零下になる気象条件などの

問題をかかえていることがわかった。

(三浦, 馬淵)

b. 小高町薬師堂石仏の保存

小高町薬師堂石仏の調査を継続して行った。

(三浦)

(6) 遺跡・住居跡

a. 三殿台遺跡住居跡の保存処置を行った(修復技術部と共同)。

(三浦)

6. 環境に関する調査研究

(1) 温度・湿度・水分

a. 中尊寺金色堂の調査

中尊寺金色堂の燻蒸にともない、燻蒸中の温湿度変化を調査した。燻蒸後の外気取入れによる目だった変化はみられなかった。この他、中尊寺で現在展示・収蔵施設として用いている讃衡蔵の温湿度測定を開始した。外気が流入する展示室の湿度はかなり高い。

(三浦, 石川)

(2) 大気汚染

a. 正倉院展の展示環境調査

文化財の環境における汚染因子の調査は従来から行っているが、東京国立博物館において開催された正倉院展の展示環境中の硫黄酸化物の測定を行った。屋外の硫黄酸化物は31ppbであったが展示室内では0.7~0.9ppbが検出された。

(門倉)

b. 酸性雨

近年話題になっている酸性雨つららに着目し、異なる地点で採取したコンクリートに見られる結晶性物質をX線回折法で測定した。現在までに同定された化合物はいずれも炭酸カルシウムであった。

箱根彫刻の森美術館屋外彫刻に析出した白色結晶についてX線回折法により分析した結果、硫酸カルシウムが検出された。内部に残存する鋳型の1部が雨水の侵入により溶出し再結晶したものと考えられる。

(門倉)

(3) アルカリ因子

a. 「アルカリ因子」に対する意識調査

建築業界における「アルカリ因子」への対応について調査し、また、過去の研究成果について集約を試みた。

(佐野, 三浦)

調査研究

b. 不良環境下での曝露試験

岩絵の具などの絵画材料および絹を、「アルカリ因子」濃度の下がらない博物館中で実際に曝露し、曝露試験前後の試料の化学状態について分析を行った。

(佐野, 石川)

(4) 生物

a. 写真資料のカビによる被害

カラーのスライドや印画紙に発生するピンク色の斑点は、好稠性のカビが代謝生成する有機酸に起因した。

(新井)

b. 古墳壁画の褐色斑点

エジプトのツタンカーメン王墓壁画の褐色斑点が絶対好稠性カビに属するペニシロイデス菌に起因することが判明し、一種のフォクシングであると考えられた。

(新井)

c. 水漬け木製品の保存展示

出土木製品の水漬け展示中の水槽に緑藻が増殖する。その防除対策を検討し、光合成阻害剤の1種が有効であった。

(新井)

d. 屋内浮遊菌の制御法

ブラジルで発明された空中浮遊菌制御器ステリレールの効力を調査検討した。その結果、本器を2.5m³容の密閉空間で作動させると67時間でその空間の微生物が滅菌され、顕著な防除効果を示した。

(新井)

7. 調査・指導

(1) 展示・収蔵環境

下記の博物館・美術館・資料館などの館内環境について、温湿度・照明・汚染因子などの調査を行い、適切な条件で作品の収蔵と展示ができるよう調査指導を行った。

(石川, 三浦, 佐野)

所在地 館 名

北海道：北海道立函館美術館

茨 城：水戸芸術館

岩 手：岩手県立博物館

県立つくば美術館

秋 田：秋田市千秋美術館

東 京：世田谷区歴史民俗資料館

山 形：天童市美術館

葛飾区歴史資料館

千葉：千葉県立中央博物館	小野市好古館
神奈川：横浜美術館	島根：益田市雪舟の郷記念館
岐阜：中津川市苗木遠山史料館	出雲市文化伝承館
愛知：メナード美術館	広島：ふくやま市立美術館
安城市立歴史博物館	吉田町歴史資料館
石川：石川県立歴史博物館	徳島：徳島県郷土の森博物館
滋賀：大津市歴史博物館	徳島県文化の森美術館
栗東歴史博物館	香川：高松市美術館
京都：北野天満宮宝物館	高知：高知県立歴史民俗資料館
大阪：大阪府弥生文化博物館	福岡：福岡市博物館
兵庫：芦屋市美術博物館	大分：大分市歴史資料館
西宮市大谷記念美術館	熊本：八代市博物館未来の森ミュージアム
姫路市文学資料館	

(2) 生物被害の防除

- a. 広島県立歴史博物館で、燻蒸設備の点検、水漬け木製品の藻類対策、正面玄関に群がるハト対策を検討した。
- b. 埋め戻してあった馬絹古墳横穴石室の内部状況調査の際、生物学的調査も実施した。
- c. 重文旧目黒邸（新潟県守門村）の中倉と新倉で、ナミダタケ、オイジウム菌、ヤマトシロアリの甚大な被害があり、その対策を検討した。
- d. 国立歴史民俗博物館第2展示室の一部に壁面及び紗布にカビの発生が発見され、調査するとフォクシング要因カビの繁殖が判明した。その防除対策を具申した。
- e. 東京国立博物館で発生した加害生物を調査し、対策を講じた。
 - i. 資料館書庫：絶対好稠性カビとチャタテムシ
 - ii. 12号室：ヒメカツオブシムシ
 - iii. 東洋館第8室：ヒメカツオブシムシ、ヒメマルカツオブシムシ
- f. 三井寺名宝展で園成寺蔵の襖「松に山鳥図」の昆虫の食痕は、ゴキブリの食痕と判定した。

調査研究

g. 三ヶ日町郷土資料館の展示ケースで採集した昆虫は、タバコシバンムシであった。

h. 国立国会図書館で購入した書籍の羊皮の表紙にカビ繁殖の痕跡があり、これを調査して燻蒸処理した。なお、書籍の前小口には、ネズミの食痕も認められた。

4. 修復技術部

(1) 概要

文化財の修復に関する調査研究、科学的修復方法の開発研究とその公表、応用を主務とする。研究の対象は美術工芸品、建造物、考古資料、民俗資料など、有形文化財のすべてが含まれる。

組織としては、文化財を構成する主材料に合わせて3研究室からなっている。

第一修復技術研究室は、工芸品、建造物など木材及び漆を主とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその結果の公表を行っている。

第二修復技術研究室は、書籍、考古資料、絵画などを主として繊維または、皮革を主材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその成果の公表を行っている。

第三修復技術研究室は、建造物・考古資料・美術工芸品などの金属、石材、その他無機材質の文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその成果の公表を行っている。

とくに、科学的な修復方法の開発は、合成樹脂を利用した修理や、ブラズマ法による保存処置など保存修理の実際に大きな成果をあげている。

一方、文化財の修復に関する研究は、文化財そのものの材質、製作技法に関する科学的研究を通して、相互関係を実証することが重要な課題である。平成元年度からは修復技術部の中長期研究テーマとして、『文化財の伝統的保存修復材料に関する研究』を4か年計画で着手した。

また、とくに屋外にある不動産文化財の保存が今日的な問題となりつつある現況を踏まえて、『屋外にある文化財の劣化過程の調査と修復方法の研究』をテーマとする共同研究を平成元年度から5か年計画で発足させ、2年次を終えた。

(2) 各 論

1. 文化財の伝統的保存修復材料に関する研究（4年計画の第2年次）

A 物性に関する調査

(1) 膠着剤（漆・膠・糊・天然樹脂）

a. 漆

機器分析による漆などの同定方法を検討した。東京都浄真寺の乾漆像を対象とした測定の結果、FTIRによって、漆が検出できることを確認した。なお、同試料の下地部分からは漆を検出することはできなかった。下地材料として使用されることのある小麦澱粉および米澱粉についてはFTIRによって両者の相違は見いだせなかった。（川野辺）

b. 膠・カゼイン

建造物などに用いられた材料のうち膠やカゼインなどのタンパク質を主成分とする材料を試料のアミノ酸組成から同定した。これらが固有のアミノ酸成分を有することを利用している。具体的には山形県庁舎天井部分に用いられた試料について分析し、用いられた材料がカゼインであることが明らかとなった。（川野辺）

(2) 修復材料

a. 補絹用絹

オゾンおよび紫外線による修復用絹の劣化条件の検討と劣化装置の開発を行った。種々の条件下で得られた劣化絹を実際の修復材料として使用比較を行った。その結果、従来の電子線劣化絹に比べてよい結果を与える条件が見いだされた。より簡便な劣化装置の開発を行っている。オゾンを用いた劣化絹が実際の修復材料として使用できる感触が得られた。（川野辺）

b. 合成樹脂

パラロイド72などと類似の構造を有する一連のアクリル樹脂を調整し、紫外線、オゾンなどを用いて劣化試験、実際の修復における作業性の検討を行っている。

（川野辺）

B 材料に関する調査

a. 漆

調査研究

中尊寺金色堂巻柱の技法を調査し、漆下地と考えられていたものが、米糊を膠着剤とした可能性が強くなってきたので、8世紀から12世紀の文献資料からこの仮説を裏付ける資料を収集することを行った。(中里)

「延喜式」四十九

造神楯四枚

其料(中略)粳米六升二合著裏料

「延喜式工事解」によると、粳米は(中略)水に浸して磨して泥のごとくならしめ、煮熟して厚糊として、用いて布を黏著するの料なり、とある。

「延喜式」一七内匠 御斗帳一其。黏料粳米二升。(中略)四尺屏風四黏料(中略)粳米八升張布料

「類聚雑要抄」第四

張柱形

用途料

真漆一斗。着布一丈

紋絹六丈。綿五両

粳米(米い)一斗。春土四斗

掃墨 三升。

「類聚雑要抄」第二

同張一基塗反度

真漆一斗。

粳米一斗。春土二斗

掃墨 七升。春布一丈

などが見いだされた。(中里)

b. 金属

収集銅、鉄製品の材質と結晶構造の調査

放射化分析を行うための原子炉(武蔵工業大学)が修理中で今年度も分析ができず調査が進んでいないが、本年度は以下の建築部材の収集整理を行った。(青木)

①重要文化財 市川市法華経寺祖師堂鉄釘

②重要文化財 茨城県小山寺相輪および鉄釘、銅板

③重要文化財 日御崎神社銅金具

2. 屋外文化財の劣化過程の調査と修復法の開発（5年計画の第2年次）

(1) 塗装材料・技法

a. 日御崎神社（島根県斐川郡）

種々の塗装仕様にに基づき屋外暴露用手板を作成し、現地暴露試験と、神社各所の木材水分量の測定を行った。その結果、実験用手板と実際の部材との間に大きな相違が認められたために、神社回廊の一部で、6種類の仕様で試験塗装を行い、経過を観察中である。実験室で作成した試料片と現地で行った実験結果の相違が、認められ、その原因を検討中である。

b. 称名寺庭園木橋（神奈川県横浜市）

昨年の研究により塗装劣化の原因が合成樹脂の選択と顔料含有量の過剰であることが明らかになった。これらの点を踏まえ、再塗装仕様を提案し、現地での塗装実験も行った。平成2年末に塗装は完成した。

c. 厳島神社大鳥居（広島県佐伯郡）

大鳥居修復に伴い、根継ぎ部分の海水・生物による被害に対する塗装について検討するために、現状の被害状況調査を開始した。平成5年度までに調査・実験を行い、塗装仕様を決定する予定である。塗装だけでなく、機械的強度にも貢献できるような材料を計画している。（川野辺）

(2) 木造文化財

a. 風食痕の検出装置の開発

木造文化財の風食痕を検出し、写真撮影するために、細型蛍光灯を用いた小型のスリット照明装置を開発した。京都府お香の宮で実験を行い、肉眼では検出できなかった複数の画面の検出に成功した。さらに、ストロボ装置を用いる風食痕撮影装置の開発を計画している。（川野辺）

b. 海水に浸漬された木材の修復方法の開発

海水中に浸漬された木材の劣化状態を知るために、X線撮影、超音波測定、ファイバースコープによる直接観察などを用いる方法を検討した。これらの測定の実験のために、広島県厳島神社の大鳥居について実験を継続中である。この測定をもとにして、大鳥居の修復方法の検討を行う予定である。（川野辺）

調査研究

c. 建造物彩色の調査

京都高台寺開山堂（桃山時代）の彩色を調査した。（三輪・中里）

d. 塗漆建造物の調査

京都高台寺霊屋は、昭和29年に修理されているが、再び、塗漆部の破損が目立つようになり、修復を前提とする実状調査を行った。（三輪・中里）

(3) 屋外におかれた金属の腐食機構の解明

日御碕神社の飾金具は、海からの塩分を含んだ雨、強い風による海塩粒子を含んだ飛沫のため腐食が激しい。昨年度の実験結果から以下のような実験を行っている。

1) X線回折分析による腐食生成物の同定

蛍光X線分析の結果、微量の鉛、亜鉛を含んだ銅であることが判っている。

県、宝珠から緑色部分と赤紫色部分の錆を採取して分析した。

その結果①緑色錆→塩基性塩化銅（Atacamite）

②赤紫色錆→酸化銅（Cuprite）

これによっていわゆるブロンズ病と云われている錆が生成されていることが判明した。

2) 耐候性試験

サンプル

6×5cm×厚さ0.5mmの大きさの電気銅銅板を使用して

①電気メッキ（メッキ厚さニッケル0～30、金0.1～5μ）

②電気メッキ上にプラズマ処理（窒化チタン3μ）

③水銀箔鍍金（箔約5枚 1μ）

④①の一部にアクリルウレタン樹脂の電着塗装

耐候性試験

①日御碕での暴露試験（平成2年9月3日から開始）

②塩水噴霧試験

③キャスト試験

これらの試験の結果

①ニッケルの下地メッキは、素材の腐食抑制に効果がなく、素材に直接金メッキを行う方が腐食抑制効果がある。

- ②金に対する樹脂の付着性を向上させる電着塗装は、かなり効果があり、メッキの後処理として有効である。
- ③窒化チタン処理は、耐食性を増すが電着塗装ほどではない。
- ④金メッキが厚いほど腐食抑制効果が大きくなる。
- ⑤現地暴露試験と加速試験とは同じ様な傾向を示す。しかし現地暴露試験サンプルの方が腐食が激しい。これは海塩粒子や紫外線劣化のほか砂等の衝突による摩耗効果があることが考えられる。(青木)

3. 文化財の材質・構造・技法に関する研究

(1) 漆

正倉院伎楽面の調査

脱乾漆及び木製伎楽面25面の破損調査を行い、修復方法についても検討した。

漆芸品の調査

13世紀の蒔絵品である扇面散蒔絵手箱(東博)、州浜鶴螺鈿硯箱(個人蔵)、波文螺鈿鞍(福岡美術館)の技法的調査を行った。又18世紀の密陀絵遺品の一つである革秀寺(弘前市)の霊屋を調査し、又塗漆建造物である南部利康霊屋も調査した。

(中里)

(2) 紙質文化財

a. 古写経料紙の材質と物性の調査

古写経料紙は、現代の伝統的手漉和紙とはかなり異なった性質を示すが、その中でも墨線のにじみ具合、表面の平滑性、比重に於ける違いが大きい。本研究では、それらの物性と共に、構成繊維の分析を行い、時代による製造法及び仕上げ法の変遷をたどることが目的で、今までに収集した料紙の調査を行うとともに、修理時に所有者の許可を得てサンプリングと材質分析が行われた料紙の分析結果も収集している。(増田)

4. 材質の劣化に関する研究

(1) 染織文化財・染料

a. 鉄タンニンによる繊維製品の劣化

鉄タンニン法によって黒く染めた繊維製品の中には傷んだものが多く、明治時代によく用いられたタンニンインクも、紙に穴をあけるような傷みの原因となってい

調査研究

る。鉄タンニンがなぜ繊維や紙を傷めるのかを科学的に立証し、そうした文化財の修復法を確立しようと外部研究者の協力を得て研究を始めている。

黒染めの布は、他の色に染められた箇所と比して、劣化速度が著しく早いことに注目して、布繊維の劣化状態を分析・調査すると同時に、歴史的文献に現れる黒染めに類する記述を収集している。民間財団の研究補助金により、外部の研究者と共同して行っている。(増田、川野辺)

(2) 石造文化財

ドリルの進入速度により石材の劣化形態および劣化度を判定する方法についての実験的研究を行い、多孔質で均質な石材についてはかなり有効であることが分かった。〈ベルギー王立文化財研究所での在外研究〉(西浦)

(3) 石質文化財

多孔質で脆い凝灰岩に対するシリコン系撥水剤の効果とその耐久性に関する実験的研究を行って、最適な樹脂の選定を行い、イースター島(チリ)の石像の保存に応用された。〈ベルギー王立文化財研究所での在外研究〉(西浦)

(4) 修復材料に関する研究

同一条件に保管された場合でも、紙の種類によってフォクシングや風邪引きが発生する程度が異なる事に注目して、種々の繊維配合と処理法の異なる紙を試作し(完了)、カビ、フォクシング発生の違いを確認する実験を準備中である。(増田)

5. 文化財修復技術

(1) 紙質文化財

a. 加湿法の開発

台紙に接着された古写経料紙を剝すに際して、手術用シリコン処理ガーゼを利用した加湿法を考案し、容易かつ安全な接着部分の除去法として採用した。(増田)

b. フォクシングの出難い紙の開発

保存科学部生物研究室によって、フォクシングの主原因が黴によるものとの研究成果が得られているが、和紙の種類によって、フォクシング(褐色斑点)の現れ易いものとそうでないものがあることが、画家や修復工房から報告されている。

修復技術研究の立場からは、フォクシングの出にくい紙を製造するための、データを集める必要があり、今年度は、繊維の種類・処理法が異なる場合のフォクシン

グ発生の違いを見るため、サンプル紙を調整中である。(増田)

紙の保持する水分の内、黴の生育に利用される水分の尺度として、紙の水分活性を測定した。また、紙の水分の等温吸着線の作成によって紙の種類による水分吸着の違いを測定した。しかし、フォクシング発生の難易との有為な関係を見いだすことはできなかった。(増田)

c. 小型漉嵌め機の試作

昨年度に試作したものよりさらに簡便な机上型漉嵌め兼用サクショ・テーブルを開発した。木質積層板と金属製アングルを主な資材とし、いままで試作した漉嵌め機の中では最も低廉な費用で作成できる。本機は、ユネスコ研修生の帰国にともないタイ国立博物館にある保存部に寄贈した。

(2) 金属文化財

a. 錆の安定化处理

(i) 水素プラズマ等を用いて鉄錆の安定化处理の研究を行っているが、実際の遺物に対応する場合の条件を決める実験を行った。その結果、水素ガス400、アルゴン200の割合で混合したプラズマが効率が良いことが判った。

(ii) 本年度より千葉大学理学部助教授金子克美氏を客員研究員に迎えてチタネートシランによる金属文化財の錆の安定化处理の実験を開始した。チタネートシランは、オキシ水酸化鉄と反応を起こし安定化させるとともに撥水性をもたせて腐食を防止することが出来る。研究は、オキシ水酸化鉄とチタネートシランとの反応機構の解明と遺物に適用したときの問題について行っている。

b. 出土文化財

出土水浸木材の処理後の安定性についての実験的研究を進めており、本年度は、環境湿度変化に伴う寸法変化について、歪ゲージを用いた計測システムにより測定するほか併せて重量変化も調べる実験を、正方形の試験片を用いて継続中である。特にPEG処理したものの挙動に注目している。

昨年度開発したホットメルト樹脂による漆塗膜の接着技術の定着を計った。マンニトール・PEG法による出土木材の保存処理を行っているが、広葉樹系木材の一部に中心部までマンニトールが浸透しないために収縮してしまう事例が数例発見された。今後その原因を究明する必要がある。

調査研究

6. 遺跡・遺構の保存修復に関する研究

遺構を保存するためには、土壌含水率を土壌の収縮限界内にコントロールする樹脂を開発して横浜市三殿台遺跡、月夜野町沢口遺跡などで実験を行ってきたが、この樹脂に土壌表面に繁殖する苔やカビを防止する効果があることが判った。

史跡横浜市三殿台遺跡保存の研究を行っているが、ここでの地下水の挙動を把握するためにボーリング調査を行った結果、地表から1～2mの所に塩類が集積されている層が発見された。遺構表面の塩類風化を考えるために有益な情報が得られた。

磨崖仏など石質遺跡の新しい保存方法として、岩体中に撥水性シリコン樹脂を注入含浸し内部（背部）に撥水層を形成させて、地中水の浸入を防止する方法についての現場実験を福島県小高町の岩崖その他で行っており、施工上の問題点の整理、検討および施工後の状態観察を行っている。（科研：一般研究B）

7. 受託研究

(1) 史跡・称名寺境内庭園木橋の塗装劣化防止の研究

称名寺境内の木橋が著しいチョーキングを呈していたので、その原因の追求と改善方法に関しての研究を行った。その結果、チョーキングの原因は、室内塗装用樹脂を顔料過剰の状態で用いたことによることが、再現実験により明らかにされた。現状の塗膜の除去と現環境に適した塗装仕様を決定するために、種々の合成樹脂を用いて、促進劣化実験を行い、塗装仕様を決定した。本仕様に従い、実際の塗装も元年度中に終了し、良い結果を示している。

(2) 風邪引き紙の保存研究

東京・京都の日本画材料店で購入した新しい日本画用紙のうち6種について、等温湿潤に於ける紙の吸着水分量を測定した。測定結果からは、雁皮紙の高湿度に於ける吸着水分量が麻紙や楮紙に比較して高いことが示された。しかし、雁皮紙より麻紙の方がカビが発生し易いとの日本画家などの指摘があり、測定の結果得られた吸着等温線からは、実際のカビ発生の具合いを説明できない。今後は平衡含水率にいたる吸湿速度を測定する必要があると感じている。

(3) 隈・西小田地区遺跡出土銅鏡・銅戈の保存修復研究（福岡県筑紫野市）

福岡県筑紫野市隈・西小田遺跡から発見された銅戈の保存修復処置の研究と材質、原料産地推定などの調査

＜保存修復＞…銅戈

- ① 超音波メスによる泥や錆のクリーニング。
- ② ソクスレーによる脱塩処理。
- ③ ペンゾトリアゾールによる銅の安定化処理。
- ④ インクララックによる減圧含浸強化。
- ⑤ 破損した破片の合成樹脂による接合と補修

(4) 一宮神社七星剣の保存処置研究(高知県中村市)

＜保存修復＞…① 超音波メスによる象嵌の研ぎ出し。

- ② ソクスレー装置を用いた脱塩処理。
- ③ チタネートシランによる錆の安定化処理。
- ④ アクリル樹脂による強化。

＜分析調査＞…蛍光X線分析により象嵌の材質が真鍮であることが判った。このため従来考えられていた時代よりも新しいものとして考え直す必要がでてきた。

(5) 舟塚古墳出土金属製品の保存修復研究調査(茨城県歴史館)

舟塚古墳から発見された鉄製品および銅製品の保存修復処置研究と材質および原料産地推定などの調査(3年計画の初年度)

＜保存修復＞…銅製品

- ① 超音波メスによる泥や錆のクリーニング。
- ② 新しく開発した脱塩装置による脱塩。
- ③ ペンゾトリアゾールによる銅の安定化処理。
- ④ インクララックによる減圧含浸強化。
- ⑤ 破損した破片の樹脂による復元。

…鉄製品

- ① 超音波メス、エアーブラッシュなどによる泥や錆のクリーニング。
- ② 水素プラズマによる錆の安定化処理。
- ③ 新しく開発した脱塩装置を用いた脱塩処理。

調査研究

- ④ チタネートシランによる錆の安定化処理。
- ⑤ アクリル樹脂による強化。
- ⑥ 破損した破片の樹脂による接合補修。

5. 情報資料部

(1) 概要

情報資料部は、従来美術部資料室の行ってきた美術に関する研究資料の作成、収集、整理、保管、閲覧等の業務を充実発展させ、さらに当研究所各部所掌の研究資料に関する情報の統合化をはかることを目的とする。

当部所管の諸資料は美術部創設以来内外の研究者の利用に供され、文化財に関する研究資料センターの役割を果たしている。この機能をより充実させ、学術情報の増加と多様化に対応した所蔵研究資料の効果的利用を図るため、データの共有化を中心とする美術情報処理システムの研究、画像処理技術の応用、文献データベースの開発などを行っている。

当部研究員は、上記業務を行うとともに日本・東洋美術史各分野で研究活動を行っている。調査研究活動の成果は「美術研究」ほか学会誌、美術部と共催の公開学術講座等で発表されている。

当部は、文献資料研究室と写真資料研究室の二室をもって構成される。

文献資料研究室

美術史関係を中心とした図書・雑誌、調査研究活動によって収集された各種研究資料の整理・保管・閲覧を行っている。また、日本・東洋古美術関係の文献目録の作成とともに文献データベースの開発を行っている。各年分の文献目録は日本美術年鑑に掲載し、一定期間ごとに総合・増補し「日本・東洋古美術文献目録」として刊行している。現在、昭和41年～60年分について編纂作業をすすめている。

写真資料研究室

研究用写真資料の作製、収集、整理、保管、閲覧を行うとともに各研究者の調査研

究活動に協力して研究資料を撮影し、資料の充実につとめている。また、これに平行して、美術研究所当時に撮影したガラス原板の転写を昨年度に引続き実施するとともに、美術史研究への画像処理技術の応用及び画像情報のデータベースに関する研究を行っている。

(2) 各 論

1. 美術情報処理システムの研究—データの共有化を中心として—(10年計画 第2年次)

(1) データ生産・蓄積・利用の実態調査

先年度に引続き、科学研究費総合研究(A)「美術史研究における基礎資料の共有化とデータベースの活用」(研究代表者 米倉迪夫)を進め、また、「博物館・美術館資料に関する情報交換のためのプロトコルの研究」(科学研究費総合研究A 研究代表者 高見沢明雄)、「全国文化財情報システム調査研究会」(文化庁)、「歴史系研究支援情報処理の研究」(国立歴史民俗博物館共同研究)に参加し、美術史研究機関におけるデータ生産・蓄積・利用の実態の把握につとめた。

先年度に科学研究費により入力を終えた「画史叢書」全文データベースを、モニターとしての利用を希望する諸機関に配布し、効果的な利用・分析方法についての情報交換を継続中である。

(2) データフィールドの検討

文献資料、写真資料、テキストを主要データフィールドとし、それぞれの特性と相互のリンクを前提としたデータ構造について検討した。各データフィールドのリンクの際の有効なユーティリティとして考えられるキーワード辞書についても、そのデータ構造について検討を行った。

(3) パイロットモデルへの基礎作業

上記の検討に従って、文献資料については、所蔵図書を中心としたシステムの試験的運用を継続しており、また、キーワード辞書を利用した検索システムのパイロットモデルを試作した。写真資料については、文字データを順次入力中であり、同時に、イメージデータの入力を想定したパイロットモデル作成のための基礎作業を進めている。テキストデータについては、入力を終えたデータに対しタム切り出し等の処理

調査研究

を開始し、先年度に続いて科学研究費により「日本画論大系」の入力を行った。また、データ通信の基礎的研究を開始した。

○「美術史研究における基礎資料の共有化とデータベースの活用」(総合研究A)

研究代表者 米倉迪夫

研究分担者 鈴木廣之、島尾 新、井手誠之輔、長岡龍作、須藤弘敏(弘前大学)、高見沢明雄(東京国立博物館)、伊與田光宏(千葉工業大学)、有川治男(国立西洋美術館)、木村三郎(日本大学)、丸山伸彦(国立歴史民俗博物館)、鯨井秀伸(MOA美術館)、早川閑多(国際日本文化研究センター)、奥平俊六(大阪府立大学)、林 進(大和文華館)、藤田伸也(大和文華館)、中部義隆(大和文華館)、梶谷亮治(奈良国立博物館)、下坂 守(京都国立博物館)

【研究の目的】

近年、人文科学の分野においても様々な学術的データベースの構築例が飛躍的に増大し、一方、パーソナル・コンピュータの普及にともない研究者個人によるデータ生産も日常化しつつある。しかしながら、これらデータベースの利用環境が十分に整備されているとは言い難く、また、様々な目的・種類のデータ生産に有効利用できる基礎資料のデータベース化も進展していない。こうした状況のなかで、データ生産・利用に関する具体的なシステムを総合的に検討することは極めて重要な意義を持つ。

当研究グループは、これまでに美術史研究を支援するデータ領域の諸特性を生かしたモデル開発に取り組んできた。本研究は、こうした実績をふまえ、美術史の基礎資料のデータベース化と、広範な研究者による相互利用システムの確立を通じ、資料の共有化と研究支援環境の整備を具体化することを目的とする。

【平成2年度の研究実績概要】

1 研究分担者会議

計画全体にわたる研究方針・各年度の研究実施計画を確認するとともに、計画細目の検討を行った。分担者会議での検討をふまえ、下記事項についてデータの入力とそれらの処理等に関する研究を行った。

2 データファイルの作成

ユーティリティ：各種FEP上での使用を目的とした美術史研究者専用辞書データファイルの作成

全文テキストデータ：『本朝画史』など日本の画史・画論の全文テキストデータ

3 データ処理等に関する研究

美術史辞書作成のための用語の選択と語の属性に関する研究

キーワード辞書を利用した検索システムのパイロットモデルの作成

全文テキストデータの処理に関する基礎的研究

データライブラリについての検討

4 研究会の開催等

研究会を開催し、入力データの処理例について各研究班から研究経過報告を行った。また関連機関・研究者に対して作成データの試供をおこなった。特に全文テキストデータについては、ひろくモニターを募り、その利用方法についての情報交換の場を確保した。

2. 日本・東洋美術史文献データベースの開発（6年計画 第3年次）

(1) 文献情報のデータフィールドと構造

1) 図書データの検討。(特性__物品管理面での出力要求への対応)

2) 定期刊行物所載文献データの検討。(特性__逐次変化管理，文献書誌が入れ子型)

(2) キーワード辞書作成のための基礎的条件

1) 辞書モデル開発のための諸条件の検討（各データフィールドの有機的結合，研究利用への対応等）

2) 辞書モデル開発（PC9801，DB3，文献データベース＋辞書データベース）

3) 成果発表（国立歴史民俗博物館研究会，情報処理学会，アートドキュメンテーション研究会等）

(3) データベースの作成

1) パイロットモデルの運用評価（美術年鑑所載文献検索，文献資料管理）

2) データベースの作成開始（定期刊行物所載文献—1966年以降刊行—）

3) 目録作成の基礎的研究（データベースの出力結果の利用）

3. 美術史における画像処理技術の応用に関する基礎的研究（5年計画 第2年次）

(1) デジタル画像処理による美術作品の分析方法の検討

調査研究

1) 画像処理の基本機能を複合する必要がある諸ルーチンに関して、その手順・条件及び問題点を検討したが、本年度はとくに、空間フィルタリング処理についての実験を行った。空間フィルタリング処理とは、画像における濃淡変化の激しい領域（高周波領域）と緩やかな領域（低周波領域）との性質を加減する処理であるが、この処理を通して、エッジの検出や画像の鮮明化を行った。あわせてフィルタリング・パターンの定義に由来する十数種類の処理についてメニュー化し、パッケージソフトの一部とした。

2) X線画像の鮮明化においては、濃淡変化の階調幅を256階調にまで強調する方法を検討した。また特定領域のみの鮮明化についても実験を行った。さらにその明示法については、階調変化を疑似カラーによって表示することとし、鮮明化と疑似カラーの処理を一貫しておこなうルーチンをメニュー化した。

(2) 画像の蓄積に関わるデータベースシステム

複数画像の一覧表示の検討を行い、以下の手順を実行する基本モデルを試作した。

- 1) ホストコンピュータ・ソフトの作品データベースより、検索条件にもとづいて検索する。
- 2) 検索結果から画像が蓄積されている光ディスクのファイル情報をNEXUS側へ送信する。
- 3) ファイル情報にもとづき、検索された作品の縮小画像を一覧表示する。（一覧表示は16枚まで）
- 4) 一覧表示された画面から任意の画像を選択し、全体像を表示する。

(3) 美術作品の復元シミュレーション

観楓遊楽図屏風（フリア美術館）について、六曲各扇の構成を当初のものにあらためた修理想定画像を作成した。また紙継ぎ図面との多重表示を行った。

4. 絵巻物・肖像画の研究（米倉）

絵巻物については法然上人絵伝を中心とする高僧伝絵の研究を継続、また肖像画は鎌倉時代肖像画の発生期についての検討を行った。その成果の一部は美術部・情報資料部公開学術講座で発表した。

5. 室町水墨画の研究（島尾・井手）

昨年度に引き続き、室町水墨画研究会の共同調査として、以下の活動を行った。

なお、この研究は、美術部中長期計画「美術に関する基礎資料の研究」（5年計画第2年次）の一環として、以下の共同研究者の協力のもとに行った。

○共同研究員

河合 正朝（慶応大）

横田 忠司（多摩美大）

相沢 正彦（神奈川県博）

大石 利雄（群馬県立女子大）

山下 裕二（明治学院大）

小川 知二（茨城県立歴史館）

坂口 薫（多摩美大）

(1) 関東水墨画の調査

箱根早雲寺・正眼寺（90年12月）、静岡県立美術館（91年2月）において、関東水墨画を中心に調査を行った。

(2) 調査結果の公表

美術史学会東支部例会（90年7月 於多摩美術大学）において、調査・研究の成果を報告した。

1) 調査作品百数十点の基礎データをデータベース化し、プリントアウトに写真のコピーを付して、参加者に配布し、井手がその概要を報告した。収録したのは、神奈川県立博物館・茨城県立歴史館・栃木県立博物館・板橋区立美術館・正宗寺・岡山県立美術館の所蔵品である。

2) 横田忠司（共同研究員）は、中世の諸史料に見える関東画壇関係の記事を収集し、関東に於ける絵画状況についての研究成果を報告した。

3) 大石利雄（共同研究員）は、逸伝画家官南について、作品及び文献史料を収集し、その室町絵画史における位置づけを試みた。

6. 請来絵画研究（井手）

鹿島美術財団より助成をうけた「杭州をめぐる仏教絵画—宋時代江南における仏教絵画と東アジア地域への波及—」の研究の一環として、国内に伝存する中国仏画、高麗仏画の調査を行った。

調査研究

7. 中国絵画研究（鶴田）

富岡鉄斎筆録の読解を継続し、中国絵画関係史料の調査を行った。上海図書館、北京・中央美術学院、台北・鴻禧美術館等において民国期絵画資料の調査をおこなった。

8. 古代仏教彫刻研究（長岡）

奈良時代後期・平安時代初期の仏教彫刻について、1)中国・朝鮮美術との比較、2)絵画・浮彫作例との比較、の両面において研究を進めた。国内の作例とともに、韓国ソウル及び慶州所在作例について調査をおこなった。

6. アジア文化財保存研究室

(1) 概 要

日本を含むアジアの文化財はアジア固有の素材を用い、独特の自然環境の中で傳承されて来ており、その保存・修復についても固有の伝統的手法を維持して来た。アジアの文化財の保存・修復については、特に、文化財そのものの自然条件、材質などに関する詳細なデータが必要で、これらを基礎にした修復材料や、修理方法などについての研究が是非とも必要である。

アジア文化財保存研究室は、これらの調査研究、資料収集を実施するために、平成2年10月1日に発足した新しい研究室である。現在、研究室ではアジア文化財およびその保存に関する資・試料の収集、整理、データベースの作成を行っており、また、基礎研究として、屋外石造文化財の劣化の地質学的研究、および石材の強化保存処置に関する材料、処置方法の研究等を行っている。さらに、アジア諸国の専門家の研修などに関わる仕事もしている。

(2) 各 論

1. アジア諸国における文化財保存に関する情報の収集

(1) 文化財の劣化状態および保存対策についての調査

a. インドネシアの代表的な石造文化財であるボロブドールおよびブランパン近郊の遺跡の劣化状態、保存修復状況、並びに調査、保存計画などについての現地調査を行った。（西浦）

b. ジャカルタのインドネシア国立博物館で開かれたユネスコ主催の「石造および木造文化財の保存修復セミナー」に講師として参加し、インドネシアにおける文化財保存技術の実体についての情報収集を行った。(西浦)

c. 韓国のソウルおよび慶州の代表的な石造文化財について、その劣化状況と保存対策についての調査を韓国文化財研究所と共同で行い、報告書を作成した。(西浦)

d. アジア文化財保存セミナーで来日したアジア諸国代表が持参したスライドを借り受け、デュープしてそれぞれについて彼らにコメントを付けてもらい資料とした。
(西浦)

e. アジア文化財保存セミナーで来日したアジア諸国代表に、各国の最も代表的な文化財について、その保存状況と保存対策についてのアンケートを出し、多くの情報を得た。(西浦)

(2) 文化財保存に関わる組織、機構、プロジェクト等についての調査

a. アジア文化財保存セミナーで来日したアジア諸国代表に、各国における文化財保存に関わる組織、機構、プロジェクト等についてその現状と問題点についてのアンケートを出し、多くの情報を得た。(西浦)

b. 東京国立文化財研究所を訪れたアジア諸国の文化財保存関係者から個別に各国の状況を聞き取り、資料とした。(西浦、増田)

c. アジアの文化財の保存に関わる講演会、研究会などに積極的に参加し、資料の収集に努めた。(西浦、朽津)

2. 屋外石造文化財の劣化と保存修復処置に関する研究

(1) 石材の劣化現象についての岩石学、鉱物学的調査研究

a. 大分県、重文・元町石仏の表面に大量に析出している白色物質が、テナルダイト (Na_2SO_4) であることをX線回折分析により確認した。(朽津)

b. ブリヂストン美術館所蔵の大理石像である「勝利の女神像」の劣化状態を岩石学的に分析した結果、薬剤クリーニングによる影響が考察された。(朽津)

c. 旧石器から弥生に至る各時代のサヌカイト製石器について、それぞれの風化皮膜の厚さを測定することによって、サヌカイトの風化速度が約 $4.1 \mu\text{m/ky}$ であることを算出した。この風化速度を基にして、時代不明のサヌカイト製石器の風化皮膜の厚さを測ることによって、石器のおおまかな年代推定の可能性が拓けた。(朽津)

調査研究

d. 神奈川県砂田台遺跡から出土した、ホルンフェルス製の石器を観察し、石器の風化状態、風化メカニズム、風化速度について考察を行った。(朽津)

e. 南関東の黒色緻密質安山岩製の石器について、偏光顕微鏡下で岩石組織を観察し、原石の組織と比較することによって石器の原産地推定を行った。(朽津、柴田)

f. 岡山下の古墳の縦穴式石室に用いられている石材について、岩石組織に基づいて原産地推定を行い、一部の試料は香川県から持ち込まれていることを明らかにした。(朽津)

(2) 石材の保存材料に関する調査研究

石材の強化および撥水処理に用いられる代表的なシリコン樹脂について、その物性を比較検討するための実験的研究を開始すべく、資料の調査、材料の入手を行っている。特に、ヨーロッパで広く用いられている変性エチルシリケート系強化剤である Wacker OH と日本で専ら用いられている SS-101 との比較を行う予定である。(西浦、朽津)

(3) 遺跡、遺構の保存処置に関する調査研究

a. 磨崖仏など石質遺跡の新しい保存方法として、岩体中に撥水性シリコン樹脂を注入含浸し、内部(背部)に撥水層を形成させて、地中水の浸入を防止する方法についての現場実験を、福島県小高町の岩崖その他で行っており、施工上の問題点の整理、検討および施工後の状態観察をおこなっている。〈科研：一般研究B〉(西浦)

b. 福島県小高町、史跡・薬師堂石仏の劣化状態を定期的に調査しており、大屋根架設後の岩体の乾燥に伴う状態変化について、保存処置法を踏まえつつ、調査を行った。(西浦)

3 金属文化財の錆に関する鉱物学的研究

近畿地方出土の古代青銅製品表面の錆について鉱物学的観察を行った結果、表面に孔雀石($\text{Cu}_2(\text{OH})_2\text{CO}_3$)、内部に赤銅鉱(Cu_2O)という累帯構造状の錆になっていることが判った。(朽津、佐野)

4 彩色建造物の保存修復に関する研究

社寺等の外部化粧としての丹塗塗装について、合成樹脂等種々の材料によって耐久性を改良する方法とその問題点を実験的に研究、考察するために、東京国立文化財研究所屋上と島根県日御碕神社において試験片の曝露試験を行っている。今までのとこ

ろ、丹を含まない合成樹脂塗料が抜群の耐久性を有していること、丹と合成樹脂を混合すると極端な変色など種々のトラブルが生じること等が判明している。(西浦、川野邊、岡部)

7. 国際調査研究

(1) 敦煌文化財保存修復に関する調査研究

1. 「敦煌莫高窟第194窟、第53窟の保護に関する日中共同研究」合意書の調印

昭和61年度以降、東京国立文化財研究所と敦煌研究所は、莫高窟壁画および彩塑像の保存環境について既に共同研究を行って来ているが、今後更に本格的に本共同研究を進めるに先だって、双方の間で共同研究についての合意書を作成し調印した。

調印日：平成2年12月26日

調印場所：文部省特別会議室

調印者：日本側 東京国立文化財研究所長 濱田 隆

立会者 文化庁文化財保護部長 田村 誠 他

中国側 敦煌研究院院長 段 文 傑

立会者 敦煌研究院保護研究所長 孫 儒 僞

甘肅省文化庁文物処長 鐘 聖 祖 他

要 旨：

本共同研究は、莫高窟壁画、彩塑像の保存、修復技術を確立し、将来にわたって理想的な保存、修復を行うことができるようにすることを最終目標として、当面5ヶ年をもって研究達成の期間とし、必要な調査、測定、分析、実験などを第194窟と第53窟をフィールドとして日中共同で行うものである。

研究組織としては、研究を統括する技術委員会（日中それぞれ3名ずつ計6名からなる）をつくり、その下に日中双方の研究者で構成する3つの研究班、即ち環境研究班、病害研究班および修復材料研究班を設置する。

研究期間は平成3年4月から5年間で、これを3段階に分けて進める。第一段階では、壁画、彩塑像の劣化状態、過程、因子を正確に把握するために、環境条件（温度、湿度、日照等）の測定と解析、岩石、壁画や彩塑像の顔料等の材質分析などの基

調査研究

基礎的調査研究を行う。第二段階では、第一段階で得られた結果を基に、病害の原因究明を行う。また、より有効、適切な保存、修復材料および工法についてシュミレーション実験等を行って科学的、技術的に検討、考察する。第三段階では第二段階で得られた結果を基にして、実際の壁画、彩塑像についての保存・修復処置法を確定し、報告書の作成を行う。

本研究は、日本、中国の両方で行う。そのため、日本側研究者は年に2回（原則として春と秋）訪中し、中国側研究者は年に一度来日してそれぞれ共同研究を行う。また、中国側の人材育成を目的に、敦煌研究院の若手研究者、技術者を年に2人ずつ日本に招聘し、3カ月間の研修を行う。

2. 中国における調査研究および協議

(1) 第1次訪中

平成2年10月19日～31日に田村誠文化庁文化財保護部長、濱田隆所長、最所親志庶務課長に2名の研究者を加えた計5名の訪中団が敦煌を訪れ、日中共同で下記の調査、研究、協議を行った。また、関連調査として炳靈寺石窟、麦積山石窟の調査を行った。

- a. 194(195)窟と53(469)窟に設置した温度、湿度、日照計測システムからのデータの読出しと初期解析。
- b. 194窟に設置した外部風速、内部微風速計測システムからのデータの読出しと初期解析。
- c. 壁画劣化状態の実地調査と関連資料の調査。
- d. 今後の研究の進め方および人物交流についての協議。

(2) 第2次訪中

馬淵久夫保存科学部長以下5人の研究員に、高橋誠記文化庁伝統課課長補佐、神庭信幸国立歴史民俗博物館助教授、江原勉庶務係長を加えた計8名の訪中団が敦煌を訪れ、日中共同で下記の調査、研究、協議を行った。

- a. 日中共同研究合意書の調印を受けて、合意書に基づく具体的研究の進め方についての協議。
- b. 194(195)窟と53(469)窟に設置した温度、湿度、日照計測システムからのデータの読出しと初期解析。

c. 194窟に設置した外部風速，内部微風速計測システムからのデータの読出しと初期解析。

d. 壁画劣化状態の実地調査と関連資料の調査。

3. 日本における調査研究，協議および研修

(1) 平成2年12月20日～29日段文傑敦煌研究院長を団長とする5名の訪日考察団が来日し，日中共同研究合意書の調印を行うとともに，本共同研究の基本的な進め方について東京国立文化財研究所および文化庁において協議を行った。また，併せて日本における文化財保存の現状についての視察を行った。

(2) 平成2年12月21日～平成3年3月5日敦煌研究院保護研究所員の郭宏，向曉梅の2名が来日し，走査型電子顕微鏡等の分析機器の操作方法などについての研修を行った。

4. 第6回敦煌莫高窟壁画保存修復協力会議

平成3年3月8日，協力会議委員，東京国立文化財研究所関係者，文化庁関係者において開催され，次の議題について討議がなされた。

- a. 第5回敦煌莫高窟壁画保存修復協力会議議事録（案）について。
- b. 平成元年10月以降の研究交流及びその後の状況について。
- c. 平成2年10月訪中報告について。
- d. 日中共同研究に関する合意書の調印について
- e. 合意書に基づく技術委員会および共同研究班の設置，人選について。
- f. 今後の共同研究の進め方について。

(2) 米国スミソニアン研究機構との共同研究

昨年に引き続き，「東アジア地域の古文化財（青銅器および土器・陶磁器）の保存科学的研究」（科学研究費「国際学術研究」）を基礎にして，研究交流を行った。アメリカ側からは2名が来日して共同研究を行った（平成2年7月および3年1月）。日本側からは平成3年2月に11名が渡米して討議を行った。日米共同研究の中で本研究所が得た成果は，①鉛同位体比データベース化のための標準資料の測定，②鍍金層の厚みと表面の状態の観察，③メスbauer分光法による青銅鏽中のスズの原子価状態の測定である。

調査研究

8. 主要研究業績

- ①：著書・編書 ②：論文 ③：解説 ④：研究発表
⑤：講演・放送 ⑥：その他 平成2.4～平成3.3

美術部

関 口 正 之 (美術部長)

- ①『日本の仏像大百科4 天』 ぎょうせい 3. 3

- ②三井寺蔵不動明王八大童子像について (「三井寺の仏教美術」)

仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告20 2. 11

- ②三面大黒天画像について—モチーフ転用の一例として—

科学研究費一般研究(A)

「日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究」

報告書

東京国立文化財研究所 3. 3

- ③不動明王二童子像

『国華』1144 3. 3

鈴木 廣 之 (主任研究官)

- ②伝岩佐又兵衛筆 瀟湘八景図巻

『国華』1133 2. 4

- ②美術史研究における画像処理技術利用の現段階 (共著)

「国立歴史民俗博物館研究報告」第30集 3. 3

- ②歌のこころ、絵のことば—瀟湘八景モチーフの交流—

科学研究費一般研究(A)

「日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究」

報告書

東京国立文化財研究所 3. 3

- ③障壁画——人と空間とがつくりあげる「場」

『人間の美術』8 黄金とクルス 学習研究社 3. 7

- ③日本美術史研究事情——アメリカの美術館と大学——

『文化財月報』268 3. 1

- ④Screen Painting and *Kaisho* : The Milieu of Japanese Painting III—V

Department of East Asian Languages and Cultures, Columbia University

主要研究業績

1990.4-6

④ 円山応震筆駱駝図をめぐる

High Attick Lecture, Dept. of Asian Art, Metropolitan Museum of Art 1990. 9

④ 米国の日本美術史研究について 美術部・情報資料部研究会 3. 1

三宅久雄(第一研究室長)

② 来迎三尊形式の展開

『日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究』

東京国立文化財研究所 3. 3

④ 宋代彫刻と鎌倉彫刻 所内総合研究会 2. 6

④ 文化財研究における情報処理(彫刻)

重要文化資料研究協議会 東京国立博物館 2. 7, 18

⑤ 奈良仏像巡礼一左保路・西の京一 朝日カルチャーセンター 2. 5

⑤ 阿弥陀来迎の影像 京都国立博物館土曜講座 3. 2

井上一稔(第一研究室)

② 天台浄土教(十世紀)における来迎表現—真正極楽寺像を中心に—

『日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流』

東京国立文化財研究所 3. 3

③ 『日本の仏像大百科4・天』解説 ぎょうせい 3. 3

③ 『日本美術全集4 東大寺と平城京』解説 講談社 2. 6

④ 奈良時代石山寺観音像考 美術部・情報資料部研究会 3. 2

⑤ 興福寺・大安寺・元興寺 朝日カルチャーセンター 2. 6

⑤ 近江の十一面観音 朝日カルチャーセンター 2. 11

三輪英夫(第二研究室長)

② 黒田清輝と構想図—「昔語り」を中心に— 「美術研究」350 3. 3

③ 黒田清輝筆「少女—雪子十一歳」 「美術研究」348 2. 8

⑤ 黒田清輝《昔語り》と西園寺公望 京都国立博物館夏期講座 2. 7, 31

⑤ 黒田清輝一人と作品— 八戸市民大学講座 2. 10, 12

⑤ 御屋外国人—フォントナージとサン・ジョヴァンニー—

神奈川県立博物館 2. 11, 3

調 査 研 究

- ⑤水彩画の先駆・三宅克己 徳島県立近代美術館 3. 1, 27
- ⑤日本近代画家の青春像 西宮市大谷記念美術館 3. 2, 9
- 佐 藤 道 信 (第二研究室)
- ②明治美術と美術行政 「美術研究」 350 3. 3
- ②「絵」「画」「図」の歴史的意義—明治前期の絵画と意匠
科学研究費一般研究(A)
「日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究」
報告書 東京国立文化財研究所 3. 3
- ③明治日本画の源流 「三彩」 517 2. 10
- ③近代日本画における大和絵と映丘 姫路市立美術館だより 28 2. 10
- ③作家略伝 日本美術院百年史 第2巻 2. 12
- ③作品解説 秘蔵浮世絵大観ムラーコレクション 講談社 2. 12
- ③個展序 小滝雅道 個展 2. 12
- ③作品解説 近代日本画の春展図録 2. 12
- ③『東洋絵画叢誌』解説 近代美術雑誌叢書3 ゆまに書房 3. 2
- ③作家・作品解説 関連年表 昭和の文化遺産2 日本画Ⅱ ぎょうせい 3. 2
- ③作家解説 新潮日本人名辞典 新潮社 3. 3
- ④明治美術と美術行政 美術史学会東支部例会 2. 9
- ④在外日本美術コレクションと日本イメージ 比較文化研究会 3. 3
- ⑥小林清親展企画編集 読売新聞社 3. 3
- 山 梨 絵美子 (第二研究室)
- ①「私の美術館」(共著) 大日本絵画 2. 5
- ②徳川慶喜の油絵 「三彩」 515 516 2. 8
- ②文化史の中の徳川慶喜 「徳川慶喜とその時代展」図録 朝日新聞社 2. 8
- ②黒田清輝の作品と西洋文学 「美術研究」 349 3. 3
- ③作家解説(藤島武二, 岡田三郎助他)「昭和の文化財 洋画Ⅰ」 ぎょうせい 2. 7
- ③鹿子木孟郎筆 某末亡人の肖像 「美術研究」 349 3. 3
- ④庭にモチーフを得た黒田清輝の作品とその自然観 明治美術学会例会 2. 8, 25
- ④黒田清輝と西洋文学

主要研究業績

美術部・情報資料部公開講座

国立西洋美術館 2.12, 1

⑤鹿子木孟郎 人と芸術 神奈川県立近代美術館県民アカデミア 2.11, 18

芸能部

佐藤道子(芸能部長)

②達陀の道 大系「日本歴史と芸能」3 平凡社 2. 2

②都市における伝統芸能の保存 「都市問題研究」 2. 8

②醍醐寺の法華八講—法楽会に見る— 『醍醐寺の密教と社会』山喜房 3. 2

④修正大導師作法の教化 法会と唱導に関する学際的研究 2. 6

④三宝絵詞—比叡舍利会— 法会と唱導に関する学際的研究 2. 7

※①東大寺修二会の構成と所作 下 「芸能の科学」12 昭和55. 7

※印は補遺

羽田 昶(演劇研究室長)

①能の難子事(横道萬里雄ほか4名との共著)東洋音楽選書 四, 音楽之友社 2. 5

②「武悪」のテキストと演出 「橋の会」パンフレット 2. 6

②「鷹の井戸」追跡 「芸能」33巻2号 3. 2

③基礎講座(国立能楽堂研修生用テキスト) 国立能楽堂調査養成課 3. 3

⑤「芸を聴く」6~8(演目解説と常磐津文字太夫, 内海桂子・好江,
吉住小三郎との対談) 古今小劇場 2.4~2.12

⑤外国人演劇研究者のための狂言概論 ITI ワークショップ 2. 8

⑤能の音楽 石川県立能楽堂 2. 9

⑤文学史・演劇史の中の能 愛知県扶桑町中央公民館 3. 1

⑥<狂言の劇形態をさぐる I>構成演出 蝸牛の会小公演 2. 4

⑥座談会「能と日本文化」(黛敏郎・観世栄夫と) 京都新聞文化フォーラム 2.10

鎌倉 恵子(主任研究官)

①歌舞伎評判記集成第二期(翻刻 共同)第九巻 岩波書店 2.12

④絵入浄瑠璃本の挿絵について 近松の会 2. 9

調査研究

高橋美都(演劇研究室)

- ②醍醐寺の悔過会と関連行事 醍醐寺の密教と社会, 山喜房 3. 2
 ③日本の雅楽 「名流」 2. 10
 ④法隆寺声明集(伝室町期写本)をめぐる 東洋音楽学会第41回大会 2. 10
 ④鎌倉・室町時代の声明譜本の検討 顕密仏教研究会 3. 2

蒲生郷昭(音楽舞踊研究室長)

- ①能の雛子事(横道萬里雄ほか4名との共著) 東洋音楽選書 四, 音楽之友社 2. 5
 ②長唄正本研究92~103(共同研究) 「邦楽と舞踊」478~489 1.4~2.3
 ④音楽史資料としての美術作品—初期三味線の場合を中心に—
 所内総合研究会 2. 10
 ⑤日本音楽の文献について 音楽図書館協議会集中研修1990 2. 9
 ⑥情報処理の現状と将来—無形文化財の場合—

重要文化資料研究協議会第3部会 東京国立博物館 2. 7

- ⑥青木融光・中山玄雄・吉田恒三 『朝日人物事典』朝日新聞社 2. 11
 ⑥第41回大会レポート(公開講演会ほか) 「(社)東洋音楽学会会報」第21号 3. 1
 ⑥200年前の日本 『モーツァルト・バイセンテニアル』学校法人洗足学園 3. 1

丸茂美恵子(音楽舞踊研究室)

- ①日本舞踊鑑賞入門(NHKテキスト)(共同執筆) 日本放送出版協会 2. 6
 ②日本舞踊における娘形作品の技法研究(19~22)
 「季刊 舞踊研究」53~56 2. 6~3. 3
 ②歌舞伎舞踊の研究(舞舞台本研究会20~26) 「邦楽と舞踊」478~484 2. 4~2. 10
 ③「七福神」ほか9曲(共同執筆) 関西舞踊草扇会プログラム 2. 5
 ③「梅川」ほか64曲 舞踊草扇会プログラム 2. 8
 ③「山唄り」ほか4曲 「至芸 伝統のきわみ」プログラム 2. 11
 ③伝承作品とその思い出(共同執筆) (吾妻)徳穂の会プログラム 3. 3
 ⑤「八段目」下の巻について 芸能部公開学術講座 2. 12
 ⑥国史大辞典(第11巻 花柳寿輔・花柳流・坂東流の項目) 吉川弘文館 2. 9
 ⑥舞踊美を織る(48~59) 「邦楽と舞踊」478~489 2.4~3.3
 ⑥情報社会の中の志賀山流 志賀山流古典舞踊研究会プログラム 2. 8

主要研究業績

- ⑥素踊といき 花柳寿魁の会プログラム 2.10
- ⑥「鎧三番叟」(脚色) (市川) 団蔵の会 2.10
- ⑥至芸 伝統のきわみ(共同構成) テレビ東京 2.11
- 中村茂子(民俗芸能研究室)
- ③無形民俗文化財の保護と問題点 「文化財信濃」(17.1) 2.6
- ④採り物と芸能一扇を中心に 芸能部夏期学術講座 2.7
- ⑥寒川神社田打舞の復興 寒川神社拝殿 3.2
- 三村昌義(民俗芸能研究室)
- ②門付芸の民俗 月刊「文化財」 3.1
- ⑤落語における忠臣蔵の受容 芸能部公開学術講座 2.12
- ⑤世阿弥の芸道一女体 高山女性セミナー 3.1
- ⑤狂言の女性たち 高山女性セミナー 3.1
- ⑥季題十二月 「插花」 2.4~2.12

保存科学部

馬淵久夫(保存科学部長)

- ②仿製鏡の化学組成と鉛同位体比(久保哲三編, 平尾と共著)
- 「下野茂原古墳群」 2.5
- ②景初四年銘龍虎鏡の鉛同位体比(平尾と共著)
- 「辰馬考古資料館考古研究紀要」2 3.1
- ②今宿五郎江遺跡出土小銅鐸の鉛同位体比について(平尾と共著)
- 福岡市埋蔵文化財調査報告書238「福岡市今宿五郎江遺跡」 3.1
- ③歴史科学と自然科学の間 東レリサーチセンター「The TRC News」33 2.10
- ③保存科学における国際協力 「文化庁月報」266 2.11
- ④劣化処理した絵絹の分光学的研究(佐野, 三浦, 川野邊と共同)
- 日本文化財科学会第7回大会 2.4
- ④絵絹の劣化の定量的評価(佐野, 三浦, 川野邊と共同)
- 第12回古文化財科学研究会大会 2.5
- ④超微量分析から探る青銅器の原料産地

調査研究

- 日本化学会第61回春季年会特別講演 3. 3
- ※②壬生西谷遺跡出土「長宜子孫」連弧文鏡の鉛同位体比
広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 75 「壬生遺跡」 1. 3
- ※②福島県福島市鎌田字月の輪山1号墳で出土したガラス玉の材料分析
(富沢, 富永, 小泉と共著) 「月の輪山1号墳発掘調査報告」 1. 3
- ※②出雲国庁跡出土「和銅開珎」の科学的調査(平尾と共著)
「八雲立つ風土記の丘」96 1. 5
- ※②東海地方で出土した弥生時代および古墳時代青銅器の科学的調査
(平尾と共著), 「都田地区発掘調査報告書」下巻 (浜松市教育委員会) 2. 1
- ※④PIXE法による古代ガラスの材質分析(富沢らと共同)
日本文化財科学会第6回大会 1. 4
- ※④和紙など有機質文化財の光による劣化の定量的評価(三浦, 佐野, 川野邊と共同)
第11回古文化財科学研究会講演会大会 1. 5
- ※⑤アイソトープ・放射線を利用した年代測定
日本原子力産業会議第4回定例研究会 1.11
- ※印は補遺
- 平 尾 良 光(化学研究室長)
- ①『沿岸環境調査マニュアルⅡ』[水質・微生物編](分担執筆)
日本海洋学会編(恒星社厚生閣) 2. 4
- ②<特集>過去を観る分析化学 3.2 鉛と年代測定 『ぶんせき』 2. 5
- ②古代日本の青銅器 『M.A.Cサイエンス』4, No.2, pp.22-33 2.12
- ②仿製鏡の化学組成と鉛同位体比(久保哲三編, 馬淵と共著)
「下野茂原古墳群」 2. 5
- ②松東銅鐸の科学的調査「浜松市松東遺跡発掘調査報告書Ⅱ」
(財)浜松市文化協会 2.12
- ②今宿五郎江遺跡出土小銅鐸の鉛同位体比について(馬淵と共著)
福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集「福岡市今宿五郎江遺跡Ⅱ」
福岡市教育委員会 3. 1
- ②景初四年銘龍虎鏡の鉛同位体比(馬淵と共著)

主要研究業績

- 「辰馬考古資料館考古学研究紀要」 2 3. 1
- ②有馬条理遺跡出土地藏菩薩立像・天王立像の非破壊蛍光X線分析法による
化学組成の調査「有馬条理遺跡Ⅱ」（古墳時代～平安時代の集落址の調査）
一関越自動車道（新潟県）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第35集一
群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 3. 3
- ④蛍光X線分析法による青銅資料の銅・スズ・鉛含有量の測定（新山と共同）
日本文化財科学会第7回大会 2. 4
- ⑤カマン・カレホユック遺跡出土金属遺物の化学組成
中近東文化センター 5月セミナー 2. 5
- ⑤カマン・カレホユック遺跡出土青銅器の鉛同位体比
中近東文化センター 2月セミナー 3. 2
- 三 浦 定 俊（物理研究室長）
- ②温度、湿度について「国宝中尊寺金色堂保存施設改修工事報告書」, 187-199 2. 4
- ②Conservation of Ornamented Tumuli and Caves in Japan and China
“Lascaux 1990 -Conservation de l'Art Rupestre(Perigord)”, pp.141-146 2. 8
- ②Temperature and Humidity in a Large Glass Showcase for a Temple Hall
(Part 2), “Preprints for 9th Triennial Meeting of ICOM C-C(Dresden)”,
pp.81-84 2. 8
- ③東京国立文化財研究所保存科学部の活動
マテリアルライフ, Vol.2, No.2 2. 4
- ④劣化処理した絵絹の分光学的研究（佐野, 川野邊, 馬淵と共同）
日本文化財科学会第7回大会 2. 4
- ④保存施設改修前後の中尊寺金色堂の温湿度環境
第12回古文化財科学研究会大会 2. 5
- ④絵絹の劣化の定量的評価（佐野, 川野邊, 馬淵と共同）
第12回古文化財科学研究会大会 2. 5
- ④高度な知的支援にむけて（自然科学の立場から）
重要文化資料研究協議会 東京国立博物館 2. 7

調査研究

佐野千絵(物理研究室)

- ④劣化処理した絵絹の分光学的研究(三浦, 川野邊, 馬淵と共同)
日本文化財科学会第7回大会 2. 4
- ④絵絹の劣化の定量的評価(三浦, 川野邊, 馬淵と共同)
第12回古文化財科学研究会大会 2. 5
- ④のぞいてみようミクロの世界—東大寺南大門仁王像彫形解体修理に関して—
所内総合研究会 2.10

※②Structures of Chlortrimethylstannane $\text{Sn}/\text{CH}_3/\text{Cl}$

Dispersed in Various Matrices(富永, 佐藤と共著)

J.Radioanal. Nucl. Chem., Letters, 137, pp.87-96(1989) 1.12

※印は補遺

新井英夫(生物研究室長)

- ①加害生物の防除対策「博物館ハンドブック」 雄山閣 2. 4
- ①微生物における被害と対策「文化財・保存科学の原理」 丹青社 2.10
- ②The Environmental Analysis of Archaeological Sites, Trends in
Analytical Chemistry (Elsevier) 2. 8
- ②日光社寺建造物の生物学的調査, 保存科学における生物学的諸問題
(平成元年度文化財保存修復研究協議会記録) 2. 9
- ③博物館実務ビデオ講座, 文化財の劣化と保存科学 丹青社 2.10
- ③石造物の生物による被害, 上智大学アンコール調査団研修用テキスト 3. 2
- ④虎塚古墳における埋蔵環境の微生物学的研究, 装飾古墳の保存と公開
日本文化財科学会第7回大会 2. 4
- ④写真資料の生物被害, 第12回古文化財科学研究会大会 2. 4
- ④Induced Foxing by Components Found in Foxed Areas,
ICOM Committee for Conservation, 9th Triennial Meeting, 1990, Dresden 2. 8
- ④On the Effect of "Sterilair" for Airborne Microbes,
VI Congresso Luso-Brasileiro de Alergia e Imunologia 2.11
- ④Brown Disease on Paintings and Books Caused by Aeroallergen Molds,
VI Congresso Luso-Brasileiro de Alergia e Imunologia 2.11

主要研究業績

- ④Fungi and Bacteria-Indoor Air Control Workshop in VI Congresso
Luso-Brasileiro de Alergia e Imunologia 2.11
- ⑤文化財の微生物による被害とその防除 (財)文化財虫害研究所 2. 6
- ⑤殺菌燻蒸と燻蒸財の安全使用について (財)文化財虫害研究所 2.10
- ⑤文化財虫害防除作業主任者のための講習会 (財)文化財虫害研究所 3. 1
- 門 倉 武 夫 (主任研究官)
- ②非破壊式蛍光X線分析法による蒔絵柱の分析
国宝中尊寺金色堂附旧組高欄・附古材保存修理工事報告書 pp.55-56.
(財)文化財建造物保存協会, 中尊寺 3. 3
- ③日本文化財科学会<第7回大会をふりかえって>
パネルディスカッション「装飾古墳の保存と公開」; (矢島国雄と共著)
日本文化財科学会会報 No.22, pp.24~32 2.10
- ③第14回国際シンポジウムをおえて 「月刊文化財」 No.327 pp.17~23 2.12
- ④絵画に発生する結晶について (小谷野と共同)
第12回古文化財科学研究会大会 2. 5
- ④Acidic Mist in the Surroundings of Cultural Property and Its Effect on Metals
The 14th International Symposium on the Conservation and Restoration
of Cultural Property—Cultural Property and Its Environment— 2.10
- ⑤絵画に発生する結晶について NHKラジオ第一放送 [今朝の話題] 2. 5,25
- ⑤絵画に発生する結晶 毎日新聞 2. 5
- ⑤絵画に起きる病気, そのメカニズムと対策
FM東京「FMさわやかステーション・今朝の話題」 2. 6,13
- ⑤Cancer' Strikes Paintings MAINICHI NEWS TODAY 2. 5,23
- ⑤酸性霧が文化財破壊! 文化財研究所が調査 読売新聞 2.10,11
- ※②新設脱塩装置について (青木, 平尾, 犬竹と共著)
「保存科学」No.29 pp.69-96 2. 3

※印は補遺

石 川 陸 郎 (主任研究官)

- ②国宝中尊寺金色堂の照明について

調 査 研 究

- 「国宝中尊寺金色堂保存施設（新覆堂）改修報告書」 2. 4
- ②国宝中尊寺金色堂内の錆について
「国宝中尊寺金色堂保存施設（新覆堂）改修工事報告書」 2. 4
- ②Environment Control of Newly-built Museums, The 14th International
Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property 2.10
- 山 野 勝 次（生物研究室）
- ①暗黒の住者—シロアリ研究の手引き—（訳書） キャッツ環境科学研究所 2. 6
- ①文化財・保存科学の原理（共著） 韓丹青社 2.10
- ②金属溶射被膜による防蟻処理（第3報）
—亜鉛溶射被膜の厚さと耐蟻性に関する野外試験— 「家屋害虫」 2. 5
- ②エキボンによる燻蒸空間内に放置した未撮影写真フィルムについて
「文化財の虫菌害」 2. 6
- ②東京都板橋区で発見されたアメリカカンザイシロアリについて
「家屋害虫」 2.11
- ②エキボンで減圧燻蒸した写真フィルムと焼き付け写真について
「文化財の虫菌害」 2.12
- ②館山市で発見されたイエシロアリの巣について 「しろあり」 3. 2
- ③博物館実務ビデオ講座—文化財の劣化と保存科学—（共作） 韓丹青社 2.10
- ③世界におけるイエシロアリの概観 「家屋害虫」 2.11
- ⑤文化財の虫害と防除（第12回文化財虫害保存研修会）（財）文化財虫害研究所 2. 6
- ⑤シロアリの生態に関する実務的知識（平成2年度しろあり防除施工士資格
第2次指定講習会） 財日本しろあり対策協会 2. 9
- ⑤文化財虫菌害燻蒸処理標準仕様書ならびに危険防止措置規定について
（第10回文化財虫菌害燻蒸処理実務講習会） （財）文化財虫害研究所 2.10
- ⑤昆虫による文化財の被害と防除
（第11回文化財虫菌害防除作業主任者の能力認定試験とその講習会）
（財）文化財虫害研究所 3. 1
- ⑥羽蟻の早期発見 日本工業新聞 2. 6

修復技術部

三 輪 嘉 六 (修復技術部長)

- ①『日本馬具大鑑』三(中世編)(編著) 吉川弘文館 2.11
- ②「Sue Ware」『The Rise of a Great Tradition』
Japan Society, New York. 2.12
- ②「文化財の保存修理」 『博物館学』Ⅱ 放送大学 3. 3
- ②「文化財の修理」 『佛教藝術』195号 3. 3
- ⑤考古資料の収集 文化庁民俗文化財講習会 国立歴史民俗博物館 2.11
- ⑤考古資料の保存修理 長野県博物館研究大会 長野県立博物館 2.10
- ⑤「高松塚古墳の諸問題」 ジャパンソサエティー考古学シンポジウム 3. 1,12

中 里 壽 克 (第一修復技術研究室長)

- ①『中尊寺金色堂と平安時代漆芸技法の研究』 至文堂 2.10
- ①『国宝中尊寺金色堂附旧組高欄附古材保存修理工事報告書』(共著) 3. 3
- ③「佛功德蒔絵経箱」 解説『国華』1133号 2. 4
- ③「梅竹蒔絵鞍」 解説『日本馬具大鑑』三(中世) 2.11
- ⑤「漆芸品の修復」博物館美術館等の保存担当学芸員研修 2. 8
- ⑤「平安時代の蒔絵技法について」 漆文化講演会 3. 2
- ※⑤漆芸品の修復 博物館美術館等の保存担当者学芸員研修 1. 8
- ※⑤漆芸品の修復 博物館美術館等の保存担当者学芸員研修 63. 8

※印は補遺

増 田 勝 彦 (第二修復技術研究室長)

- ④糊料塗布紙の発黴性(ワーニャ・プロムサクソボンと共同)
古文化財科学研究会第12回大会 2. 5
- ⑤和紙と文化財修復 第3回紙アカデミー講座 2. 4
- ⑤図書館・美術館の資料としての紙 文化財虫害研究所研修 2. 7
- ⑤史料の保存科学 平成2年度史料管理学研修 2. 7
- ⑤文化財修理の設計—絵画・書跡などに付いて—
京都府文化財保護基金研修会 2. 9
- ⑤紙の劣化と保存 第3回公文書館等職員研修会 2.10

調査研究

- ⑤紙製文化財の修復 平成2年度保存担当学芸員研修 2. 7
- ⑥高松塚の保存環境と壁画の修復
文化財学会大会パネルディスカッション「装飾古墳の保存と公開」 2. 4
川野邊 渉（第二修復技術研究室）
- ①文化財輪郭線測定システムの開発（広瀬と共著）
考古学と自然科学—日本文化財学会誌一，22，pp.77-83 2.
- ④劣化網の自然科学的研究 平成元年度日本文化財学会大会 2. 5
- ⑤文化財の材質と劣化 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修 2. 7
- ※①国指定史跡三殿台住居跡保護棟内の温湿度環境（三浦らと共著）
保存科学，29，pp.9-16 2. 3

※印は補遺

青木 繁 夫（第三修復技術研究室長）

- ②Conservation of Metallic Cultural Property Under High Humidity in Japan
Conservation of Metals in Climate 2. 5
- ④野外金属文化財の保存の現状 野外金属文化財保存研究会 2. 8
- ⑤考古資料の保存と修復 埼玉県埋蔵文化財センター 2. 5
- ⑤金属文化財の保存修復 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修 2. 7
- ⑤土製文化財の保存修復 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修 2. 7
- ⑤金属遺物の保存修復 千葉県文化財センター 2. 9
- ⑥高松塚古墳保存修理マニュアル 2. 6
- ⑥月夜町沢口製鉄遺跡の保存処理の調査・研究報告書 3. 2

情報資料部

鶴田 武 良（情報資料部長）

- ②民国期美術学校卒業同学録・美術団体会員録集成（編集）
「和泉市久保惣記念美術館・久保惣記念文化財団東洋美術研究所紀要」
2・3・4号併合 3. 3
- ②第7回全国美術展覧会について
「現代中国の美術展図録」日中友好会館美術館 2. 9

主要研究業績

②芸術経済学—書画の値段と扇子のこと

「扇絵展図録」和泉市久保惣記念美術館 2. 10

②鉄斎と中国故事画

「中国故事を画く展図録」鉄斎美術館 2. 10

②現代中国美術の変貌と未来

「STYLING」No.40 3. 1

②民国期における全国規模の美術展覧会—近百年來中国絵画史研究 1—

「美術研究」249 3. 3

②解放後の全国美術展覧会—近百年來中国史研究 2—

「美術研究」250 3. 3

③美術

「中国年鑑1990年版」中国研究所 2. 6

③作家略歴（113名）

「現代中国の美術展図録」日中友好会館美術館 2. 9

③作家略歴・解説（81名）

「扇絵展図録」和泉市久保惣記念美術館 2. 10

③作家略歴・解説（26名）

「中国を画く展図録」鉄斎美術館 2. 10

米 倉 迪 夫（文献資料研究室長）

②法然上人伝絵における法然忠痛邂逅図をめぐるノート

科学研究費一般研究(A)

「日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究」

報告書

東京国立文化財研究所 3. 3

④東京国立文化財研究所におけるデータベースの構築

アートドキュメンテーション研究会 2. 6

④文化庁情報システム構築の課題

重要文化資料研究協議会 東京国立博物館 2. 7, 18

④鎌倉時代肖像像素描

東京国立文化財研究所美術部・情報資料部公開学術講座

国立西洋美術館 2. 12, 1

島 尾 新（文献資料研究室）

②美術史研究用ルーツとしてのキーワード辞書（共著）

情報処理学会研究報告書90-FI-18 2. 7

②美術史研究における画像処理技術利用の現段階（共著）

国立歴史民俗博物館研究報告第30集 3. 3

②「キーワード辞書」を用いた美術史関係文献検索システム（共著）

調査研究

国立歴史民俗博物館研究報告第30集 3. 3

②「影響」から「共有」へー「モチーフの交流」についての覚書ー

科学研究費一般研究(A)

「日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究」

報告書

東京国立文化財研究所 3. 3

④水墨画の諸問題

仏教美術の会 2.4,21

④研究者を対象とした小規模システムの特性

アートドキュメンテーション研究会 2.6, 2

④美術史研究用ルーツとしてのキーワード辞書（共同発表） 情報処理学会 2.7,10

④日本絵画史研究におけるコンピュータ利用

重要文化資料研究協議会 東京国立博物館 2.7,18

④「影響」から「共有」へ

美術部・情報資料部研究会 2.9,12

④美術史研究の情報空間 「かたちの情報学」研究会 国立歴史民俗博物館 2.9,20

⑥書評と紹介『日本絵画史の研究』

日本歴史 2. 7

⑥日本美術史 室町

美術手帖 2.10

井 手 誠之輔（写真資料研究室）

②美術史研究における画像処理技術利用の現段階（共著）

国立歴史民俗博物館研究報告第30集 3. 3

②十三・四世紀の仏涅槃図にみる中国と日本

科学研究費一般研究(A)

「日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究」

報告書

東京国立文化財研究所 3. 3

④美術史研究における画像処理技術の応用

ーヴィジュアル・イメージの知的再生産ー

所内総合研究会 2. 4,24

④室町水墨画研究会調査概況報告

美術史学会東支部例会 2. 7, 7

⑥書評『高麗時代阿弥陀画像の研究』鄭于澤著

『デアアルテ』7号 3. 3

長 岡 龍 作（写真資料研究室）

②美術史研究用ルーツとしてのキーワード辞書（共著）

情報処理学会研究報告90-FI-18 2. 7

②来迎美術研究1 初期観経変相図の諸相

科学研究費一般研究(A)

「日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究」

報告書

東京国立文化財研究所 3. 3

②「キーワード辞書」を用いた美術史関係文献検索システム（共著）

国立歴史民俗博物館研究報告第30集 3. 3

③作品解説 日本の仏像大百科1 如来 ぎょうせい 2. 9

③作品解説 日本の仏像大百科4 天 ぎょうせい 3. 3

④美術史研究におけるキーワード辞書と検索システム

アートドキュメンテーション研究会 東京国立文化財研究所 2. 6, 2

④美術史研究用ツールとしてのキーワード辞書（共同発表） 情報処理学会 2. 7, 10

⑥キーワード辞書と検索システムのパイロットモデルについて

アートドキュメンテーション通信第6号 2. 7

アジア文化財保存研究室

西 浦 忠 輝（アジア文化財保存研究室長）

①文化財の保存を目的とした歴史的住宅建築の構造力学的研究—接合部の強度について—（伊藤，杉山，安藤と共著） 住宅総合研究財団 3. 2

①石材の凍結劣化とその防止法 科学研究費研究成果報告書 3. 3

②古建築の外装塗装の物性に関する研究（1）—丹色塗装の人工劣化促進試験—（川野邊，岡部と共著） 「保存科学」30 3. 3

④Experimental Study on the Dimensional Change of Highly Decayed

Waterlogged Wood According to Ambient Humidity After Preservation Treatment（今津と共同）4th ICOM-Group on Wet Organic Archaeological Materials Conference, Bremerhaven 2. 8

④A New Freeze-drying Method Using Mannitol and PEG for the Preservation of Waterlogged Wood（今津と共同）

9th Triennial Meeting of ICOM Committee for Conservation, Dresden 2. 8

④Assessment of Conservation Efficiency of Volcanic Tuffs Treatments

調査研究

by Radioactive Labelling (Sramek と共同)

International Conference on the Historical Monuments Made of Volcanic

Tuffs, Easter Island, Chile 2.10

④A New Method of Conservation of Rock Reliefs

UNESCO Seminar on Modern Techniques of Restoration for the

Preservation of Cultural Properties, Jakarta 3. 3

⑤Technical Methods of Preservation and Restoration of Stone and Wood

UNESCO Seminar on Modern Techniques of Restoration for the

Preservation of Cultural Properties, Jakarta 3. 3

⑥ソウル, 慶州石造文化財の保存調査報告書 韓国文化財研究所提出 2.10

⑥敦煌文化財の保存修復に関する調査研究—備忘録—(濱田, 三浦と共同) 3. 3

朽津信明(アジア文化財保存研究室)

②神奈川県砂田台遺跡出土の石器に観察された風化—考古遺物のタフオノミー—

「第四紀研究」30 3. 2

④サマサイトの風化速度(飯島と共同) 日本地質学会第97年学術大会 2.10

⑥共通一次世代の研究者 岩波「科学」60 2.11

⑥アジア文化財保存セミナー邦文要旨集<翻訳>(馬淵と共著) 2.11

⑥アジア文化財保存セミナー会議録(馬淵, 佐野と共著) 3. 1

Ⅳ．事 業

1．出 版

(1) 美術研究

平成2年度は第348号から第350号が下記の内容で刊行された。

美術研究 第348号（平成2年8月）

池大雅における画譜による制作	武 田 光 一
池大雅筆指墨山水図（図版解説）	武 田 光 一
黒田清輝筆少女雪子十一歳（図版解説）	三 輪 英 夫
内国勲業博覧会・万国博覧会関係文献所在目録	美術部第二研究室

美術研究 第349号（平成3年3月）

黒田清輝の作品と西洋文学	山 梨 絵美子
民国期における全国規模の美術展覧会	鶴 田 武 良
鹿子木孟郎筆某未亡人の肖像（図版解説）	山 梨 絵美子

美術研究 第350号（平成3年3月）

黒田清輝と構想画	三 輪 英 夫
明治美術と美術行政	佐 藤 道 信
解放後の全国美術展覧会	鶴 田 武 良

(2) 日本美術年鑑

平成2年版（平成3年3月発行）

平成元年の内容をもつ。B5判257頁。

平成元年美術界年史

美術展覧会（現代美術・西洋美術）

美術展覧会（東洋古美術）

美術文献目録（定期刊行物所載）（現代美術・西洋美術）

事 業

美術文献目録（定期刊行物所載）（東洋古美術）

物故者

(3) 芸能の科学

古典芸能についての研究論文，調査報告，資料翻刻等を掲載している。平成2年度は所属研究員による論考集の編集を行った。

芸能の科学19 芸能論考Ⅻ（平成3年発行予定）

(4) 保存科学

所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査，研究，受託研究報告等の論文報告および修復処置概報等を掲載している。平成2年度は第30号の編集を行った。

保存科学 第30号（平成3年8月発行予定）

2. 黒田清輝巡回展

黒田清輝の遺作の多くを所蔵している本研究所は，黒田清輝の功績を記念し併せて地方文化の振興に資するために，昭和52年度からの事業として黒田清輝巡回展を年1回地方において開催してきた。平成2年度は次のとおり開催された。

会 場 八戸市美術館

会 期 平成2年10月6日（土）～11月11日（日）

主 催 東京国立文化財研究所・青森県教育委員会・八戸市教育委員会

開催日数 31日

入場者数 5,212人

陳列点数 油彩・パステル60点，木炭デッサン50点，写生帖17冊，書簡3点，日記5冊，参考資料若干

図 録 A4判変型，128頁，原色図版24頁，単色図版73頁

3. 公開学術講座

美術部・情報資料部（第23回）

日 時 平成2年12月1日（土）13：30～16：30

会 場 国立西洋美術館

講 演 (1) 鎌倉時代肖像画素描

米 倉 迪 夫

(2) 黒田清輝と西洋文学

山 梨 絵美子

芸能部（第21回）

日 時 平成2年12月25日（火）18：00～20：30

会 場 矢来能楽堂

テ ー マ 忠臣蔵—落語と舞踊にみる受容と展開—

講 演 (1) 落語における忠臣蔵の受容

三 村 昌 義

(2) 「八段目」下の巻について

丸 茂 美恵子

実演と話 「八段目」下の巻

話 藤間 藤子

実演 舞踊 藤間蘭景・藤間蘭黄

浄瑠璃 常磐津初勢太夫

三味線 常磐津紫弘

聞き手 三村昌義・丸茂美恵子

4. 夏期学術講座

芸能部

芸能部においては、芸能の多角的かつ総合的な研究に資することを目的として、例年夏期4日間にわたる学術講座を、都内各大学の大学院生を対象に実施している。会場を東京国立文化財研究所会議室とし、芸能部員がそれぞれの専門分野における研究成果を体系的に論ずるかたちをとる。

平成2年度は「採り物と芸能一扇を中心に—」というテーマを設け、中村茂子が担

事 業

当し、7月2日から5日までの4日間にわたり実施した。受講者は東京芸術大学、東京大学、学習院大学、明治大学、早稲田大学、国学院大学、実践女子大学の各大学院生および国文学研究資料館、江戸東京博物館の研究者で、受講者数は18名。日程及びテーマ細目は下記のとおりである。

7月2日（月）

序論—歴史・研究史・文献—

機能分析—文学作品を中心に—

儀礼 — 1 — 有職故実・宗教・民俗

7月3日（火）

儀礼 — 2 — 中世の地方豪族に見られる扇の効用

神体—那智の扇祭り・黒川能

猿楽 — 1 — 女舞（五節舞・白拍子・曲舞）

7月4日（水）

猿楽 — 2 — 扇舞・能狂言

神楽—巫女舞・修験系神楽—

田楽—田楽躍・田遊・田植神事・田植踊—

7月5日（木）

巡遊芸、その他—千秋万歳、延年など—

絵画資料—スライドを中心に—

まとめ・質疑応答

5. 博物館美術館等の保存担当学芸員研修

近年博物館・美術館などの数が増加すると共にその施設が近代化し、燻蒸室、保存担当室、修復室などの保存に関する施設設備が整備されて、保存部門を担当する職員が配備されつつある。しかし、これらの職員が保存科学の知識や技術を修得しようとしても適切な学習の場や教材がないのが実情である。そのため博物館、美術館などの学芸員で保存を担当するものに対して、文化財の科学的保存に関する基礎的な知識および技術について研修を行い、その資質の向上をもって文化財の保護に資することを目的とし研修会を開催した。受講者数23名。日程および研修題目、講師は下記のとおり

博物館美術館等の保存担当学芸員研修

りであった。

7月23日(月)

開講式・オリエンテーション・所内見学

保存科学概論

保存科学部長 馬 淵 久 夫

保存修復概論

修復技術部長 三 輪 嘉 六

7月24日(火)

紙製文化財の修復

第2修復技術研究室長 増 田 勝 彦

実習—燻蒸—

生物研究室長 新 井 英 夫

文化財の生物劣化—虫害と対策—

新 井 英 夫

7月25日(水)

実習

増 田 勝 彦

展示環境Ⅱ

保存科学部主任研究官 石 川 陸 郎

7月26日(木)

彩色材料

東京芸術大学教授 杉 下 龍一郎

温湿度の計測

物理研究室長 三 浦 定 俊

実習—温湿度機器の補正—

三 浦 定 俊

7月27日(金)

展示環境Ⅰ—環境と劣化—

保存科学部主任研究官 門 倉 武 夫

見学

門 倉 武 夫

実習—生物—

新 井 英 夫

7月30日(月)

文化財の照明

石 川 陸 郎

実習—光源の取り扱い—

石 川 陸 郎

土製文化財の修復

第3修復技術研究室長 青 木 繁 夫

7月31日(火)

文化財の分析化学

物理研究室 佐 野 千 絵

工芸品の修復

第1修復技術研究室長 中 里 壽 克

金属文化財の修復

青 木 繁 夫

8月1日(水)

事業

文化財の有機化学

第2修復技術研究室 川野邊 渉

自由研修

8月2日(木)

科学写真の文化財への応用

三浦 定 俊

実習

石川 陸 郎

8月3日(金)

実習

石川 陸 郎

文化財の修復と合成樹脂

名誉研究員 樋口 清 治

実習

樋口 清 治

8月4日(土)

レポート作成

修了式

6. 国際研究集会

昭和52年より毎年主題を決め文化財の保存及び修復に関する国際シンポジウムを開催しているが、今年は「文化財と環境」をテーマとし、保存科学部の担当で開催した。海外から6名、国内から9名の研究報告者を迎え、外的要因に影響されやすく脆弱な文化財を取り巻くさまざまな環境の整備について、参加者120余名で活発な討議が行われた。日程および発表題目は以下の通りである。

名 称 The 14th International Symposium on the Conservation and
Restoration of Cultural Property

—Cultural Property and Its Environment—

日 時 平成2年10月11日—13日

場 所 国立教育会館社会教育研修所

(題名および発表者)

10月11日(木)

【セッションⅠ】 基調講演

1. Environmental Problems Special Topics in Japan

(日本国内における環境問題)

朝文化財虫害研究所 登石 健三

【セッションⅡ】 以下研究発表

2. Surveys for Indoor Air Pollution into Historic Buildings : the Italian Experience

(歴史的建造物における室内環境汚染の調査—イタリアの場合—)

ローマ中央修復センター M. マラベリ

3. Preservation of Outdoor Sculptures

(屋外彫刻の保存管理について)

箱根彫刻の森美術館 市川 茂

4. Clearing the Air : The Role of Environmental Chemistry in the Decay of Cultural Objects

(空気浄化…文化財劣化における環境化学の役割)

国立公園管理事務所 S. ジャーウッド

5. Acidic Mist in the Surroundings of Cultural Property and Its Effect on Metals

(文化財環境中の酸性ミストとその金属への影響)

東京国立文化財研究所 門倉 武夫

10月12日 (金)

【セッションⅢ】

6. Effect of Indoor Contaminants on Cultural Properties and Countermeasure

(室内汚染因子…その文化財への影響)

東京国立文化財研究所 見城 敏子

7. Some Practical Considerations and Solutions for Preservation in the Museum Environment

(博物館内保存におけるいくつかの問題点とその解決法の実例)

ウォルター美術館 T. ワイサー

8. Conservation Facility and Environment of the National Museum of Contemporary Art, Korea

(新築美術館の環境…現代美術館の場合)

国立現代美術館 姜 貞植

【セッションⅣ】

事業

9. Change of Temperature and Humidity of Art during Air Transportation
(空輸中における美術品の温湿度変化) 国立西洋美術館 長谷川三郎
10. RH- and Temperature-Variations in a Transit Package
(梱包ケース内の温湿度変化) 国立歴史民俗博物館 神庭 信幸
11. Showcase of Cultural Property for the Exhibition
(文化財のための展示ケースのあり方) 文化庁 半沢 重信
12. Preventative Conservation in National Trust Houses
(ナショナルトラスト所有の歴史的建築物の保存)
ナショナルトラスト S. スタニフォース

10月13日(土)

【セッションV】

13. Protecting Works of Art from the Damaging Effects of Light
(美術品に対する光の影響) ナショナルギャラリー D. サンダース
14. Environment Control of Newly-built Museums
(新設博物館内の環境制御) 東京国立文化財研究所 石川 陸郎
15. Indoor Exhibition Climate and Conservation Measures
(屋内展示環境と保存対策) MOA美術館 鯨井 秀信

7. アジア文化財保存セミナー

—石造文化財の保存における問題点—

各国の民俗的な文化遺産は人類共通の遺産であり、その保存の重要性について国際的に認識されつつある。東京国立文化財研究所は文化庁、奈良国立文化財研究所と共催で、ユネスコ・アジア文化センターの協力のもと、アジアでもっとも普遍的な課題の1つである石造文化財の保存について討議する場を設けた。国内から3名、海外から13カ国の報告者を迎え、多数のオブザーバーと共に、アジアの文化財保存に関する情報交換、国際協力のあり方に関する具体的な提言など、アジア各国の石造文化財の現状把握や保存修復に関する諸問題等について活発な論議がかわされた。日程および発表題目は以下の通りである。

名称 Seminar on the Conservation of Asian Cultural Heritage

アジア文化財保存セミナー

—Current Problems on the Conservation of Stone—

日 時 平成2年11月9日—15日

場 所 国立京都国際会館

11月9日（金） 開会式およびレセプション（於上野精養軒）

11月10日（土）—12日（月） 国外参加者の視察・見学（京都・奈良）

11月13日（火）

1. 朝大阪文化財センター 坪井清足（基調講演）
石造文化財保存の基本概念
2. ネパール考古局 Shaphalya AMATYA
ネパールの石造建造物—保存における今日の問題—
3. インド国立文化財保存研究所 Madhavan P. Velayudhan NAIR
インドにおける石造文化財の保存
4. フィリピン国立歴史研究所 Lorelei D. DEL CASTILLO
フィリピンにおける石の保存
5. 昭和女子大学 江本 義理
日本における石造文化財の保存(1)劣化の調査
6. ブータン文化特別委員会 Kinley GYELTSHEN
ブータンにおける石造文化財保存の今日の問題
7. 中国文物保護化学技術研究所 賈 瑞 廣
中国における石造文化財保存の研究

懇親会

11月14日（水）

8. ICCROM Werner SCHMID（基調講演）
石造文化財保存の方法論および科学技術的側面：最近の傾向
9. 韓国国立文化財研究所 金 奉 建
韓国における石塔の保存
10. モルディブ国立言語歴史研究所
モルディブにおける石造文化財の保存
11. タイ美術局第6分室 Borvornvate RUNGRUJEE

事業

ベラサト・ヒン・ファノム・ワンにおける石の劣化

12. インドネシア・ボロブドール保存計画局 Hubertus SADIRIN

インドネシアにおける石造文化財の保存の問題点

13. 奈良国立文化財研究所 沢田 正昭

日本における石造文化財の保存(2)材料と技術

11月15日(木)

14. ラオス文化省博物館・考古・記念物局 Thongsas SAYAVONGHAMDY

ワット・ブーとその修復における諸問題

15. マレーシア博物館局考古室 ADI Haji Taha

ケダー・ブヤン谷における石造建造物の保存

16. スリランカ考古局 Nanda Amara WICKRAMASINGHE

スリランカにおける古い記念物の保存

総合討議

閉会式

8. 会議

第19回文化財保存修復研究協議会

日時 平成2年9月27日(木) 10～17時

場所 東京国立博物館資料館セミナー室

主題 文化財の保存・修復のための調査についてⅡ

—とくに有機文化財の試料採取を中心として—

昭和62年に同じテーマを取上げ、現状把握のための調査はどうあるべきか、調査方法はどの様に改善されて来たかについて協議し、成果を上げた。今回はそのⅡとして、試料採取に関する問題を取上げた。

文化財の調査研究の上でサンプリングをどう取扱うか、その成果をどの様に文化財保存に役立てるかという問題を掘下げることにした。

講演

有機材料の分析の歴史と成果

昭和女子大学教授

江本義理

染織文化財の分析

共立女子大学教授

柏 木 希 介

パネルディスカッション

「文化財調査とサンプリングについて」

漆工芸作家

北 村 謙 一

岡墨光堂

岡 岩太郎

創形美術学院修復研究所

歌 田 眞 介

正倉院事務所

木 村 法 光

東京国立博物館

沢 田 むつ代

文化庁美術工芸課

廣 井 雄 一

文化庁美術工芸課

湯 山 賢 一

東京国立文化財研究所

三 宅 久 雄

東京国立文化財研究所

川野邊 渉

第2回アジア文化財保存修復協力センター（仮称）設置に関する調査研究会

日 時 平成3年1月31日（木）14～17時

場 所 別館会議室

内 容 アジアの文化財の保存、修復に関する国際的な研究交流、保存修復事業への協力、専門家の養成、情報の収集と活用等を実施し、文化財保護における国際的な責務を果たすとともに、文化財の保存修復に関する研究の向上に資することを目的とするアジア文化財保存修復協力センター設置のための調査研究会として、外部の専門家、文化庁および東文研関係者が出席して、センターの設置目的、事業内容、組織、管理運営、施設等に関する事項について検討、協議を行った。

事業

9. 国際・国内交流

(1) 平成2年度職員の海外渡航

氏 名	渡 航 先	目 的	期 間	備 考
鶴田 武良	中華人民共和国	民国美術学校及び美術教育資料の調査	2. 4.26～ 5.13	自己負担
馬淵 久夫	イタリア	イクロム財政・事業計画委員会、理事会及び総会出席	2. 5. 1～ 5.15	文部省
平尾 良光	トルコ	カマンカレホニク遺跡の発掘調査	2. 7.12～ 8.24	中近東文化センター
増田 勝彦	スイス	紙製文化財修復研修の実施	2. 7.25～ 9. 5	スイス高等教育基金
三浦 定俊	フランス、東独 ベルギー他	ラスコー洞窟発見50周年記念国際シンポジウム及び IIC大会出席のため	2. 8.18～ 9.11	自己負担
新井 英夫	東独、フランス ベルギー他	ICOM委員会出席及び第2回国際文化財生物劣化会議のための連絡調整	2. 8.23～ 9.22	自己負担
井手誠之輔	オランダ、西独 フランス他	ヨーロッパ所在中国絵画の調査	2. 9.14～11. 2	科学研究費
濱田 隆	中華人民共和国	敦煌文化財の保存に関する日中共同研究計画について協議及び現地調査	2.10.19～10.31	外国旅費
三浦 定俊	"	"	"	科学研究費
西浦 忠輝	"	"	"	"
最所 親志	"	"	"	外国旅費
増田 勝彦	イタリア	紙製文化財修復研究の実施	2.10.24～11. 8	ユネスコ
井上 一穂	大韓民国	金銅仏展見学及び石仏調査	2.10.29～11. 2	自己負担
長岡 龍作	"	"	"	"
新井 英夫	ブラジル	第6回国際アレルギー、免疫学会議出席	2.11. 1～11.10	"
馬淵 久夫	イタリア	イクロム財政・事業計画委員会出席	2.11.16～11.24	イクロム
鶴田 武良	中華人民共和国	近代中国絵画研究	2.11.18～11.27	自己負担
関口 正之	アメリカ	在米日本絵画彫刻の調査	2.12. 4～12.22	古文化財
増田 勝彦	"	"	"	"
三宅 久雄	"	"	"	"
島尾 新	"	"	"	"

国際・国内交流

氏 名	渡 航 先	目 的	期 間	備 考
佐藤 道信	"	日本美術関係コレクションカタログ収集	3. 1. 6～ 1.22	自己負担
三輪 嘉六	アメリカ	日本考古学シンポジウム出席	3. 1. 9～ 1.19	ジャパンS ギャラリー
鶴田 武良	台 湾	民国期絵画の調査	3. 1.16～ 1.19	自己負担
馬淵 久夫	アメリカ	スミソニアン研究機構との共同研究	3. 2.12～ 2.21	科学研究費
三浦 定俊	"	"	"	"
平尾 良光	"	"	3. 2.12～ 2.18	"
西浦 忠輝	インドネシア	ユネスコ主催セミナーでの講演及び石造遺跡の保存状況調査	3. 2.27～ 3. 8	ユネスコ
関口 正之	アメリカ合衆国	在米日本美術品の調査	3. 3. 2～ 3.22	古文化財科学 研究会
三輪 嘉六	"	"	"	"
島尾 新	"	"	"	"
三宅 久雄	"	"	3. 3. 2～ 3.15	"
井上 一稔	"	"	"	"
三浦 定俊	中華人民共和国	敦煌文化財の保存に関する日中共同研究計画についての協議及び敦煌文化財の保存状況について現地調査	3. 3. 9～ 3.23	外国旅費
馬淵 久夫	"	"	3. 3.11～ 3.23	科学研究費
増田 勝彦	"	"	"	"
西浦 忠輝	"	"	"	外国旅費
川野邊 渉	"	"	"	"
江原 勉	"	"	"	"

事業

(2) 招へい研究員

昭和53年度より招へい研究員制度が設けられ、平成2年度は国外11名、国内1名の研究員を招へいし、下記のように共同研究が行われた。

国外招へい研究員

氏 名	国籍	役 職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
モハメド・イブラヒムルトヒイ	モルジブ	モルジブ国立言語歴史研究センター特別顧問	2.11. 8 ～ 2.11.17	石造文化財の保存に関する研究	保存科学部長 馬淵久夫
段 文 傑	中国	敦煌研究院院長	2.12.20 ～ 2.12.29	日中共同研究合意書の調印並びに日本における文化財の保存状況視察	所長 濱田 隆
鐘 聖 祖	"	甘肅省文化庁文物処長	"	"	"
孫 儒 側	"	敦煌研究院保護研究所長	"	"	"
孟 繁 新	"	" 人事処長	"	"	"
楊 林	"	国家文物局助理研究員	"	"	"
向 曉 梅	"	敦煌研究院保護所職員	2.12.21 ～ 3. 3. 5	保存科学に関する研修	"
郭 宏	"	" "	"	"	"
テイテマ ワンテラブ ラサート	タイ	タイ国立博物館	3. 2.19 ～ 3. 3.13	有機遺物等の保存に関する研究	第2修復技術研究室長 増田 勝彦
チャリ シンハシリ	"	" "	"	"	"
ワランカナ エムカウ	"	" "	"	"	"

国内招へい研究員

氏 名	役 職	招へい 期 間	共同研究課題	研究代表者
久 野 寿 彦	岐阜大学教育学部教授	2. 8.20 ～ 2. 9. 1	延年の研究	音楽舞踊研究室長 蒲生郷昭

(3) 平成2年度海外研究者の来訪

平成2年4月1日～平成3年3月31日

氏 名	国 籍	所 属 等
張 徳 勤	中華人民共和国	国家文物局長 他2名
銭 法 成	〃	浙江省文化庁長 他2名
ジャン・フランソワ ジャリージュ	フランス	ギメ美術館長
馮 大 真	中華人民共和国	新疆自治区对外文化交流協会 副会長 他5名
戚 学 慧	〃	文化部对外文化連絡局他 24名
金 享 奎	韓 国	文化財管理局課長 他38名
柳 承 國	〃	(財)東方文化研究院
李 午 意	〃	
シュリソマ	スリランカ	
ダイバイ	ヴェトナム	
トーマス・チェイス	アメリカ	スミソニアン研究機構 フリーア美術館 保存主任科学者

V. 研究施設・設備

1. 蔵 書

美術関係図書

日本・東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全般にわたる研究書を中心に、関連図書、各種叢書、辞典類など、和漢書(40,068)、洋書(4,059)、計44,127冊のほか、各都道府県市町村教育委員会編集の文化財関係報告書、美術関係雑誌、紀要類、売立目録、展覧会目録などを所蔵し、所内及び所外の研究者の利用に供している。

芸能関係図書

雅楽・寺事・能・歌舞伎・文楽・邦楽・民俗芸能・寄席芸、その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書9,088冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報(第1次)・テアトロ(第1次)・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説などの雑誌、それに声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・譜本も収集している。

保存科学・修復技術関係図書

古来の伝統的生産及び工芸技術書、技術史、または数少ないそれらの科学的究明を試みたもの、修理工事報告書及び物理学・生物学部門の保存科学に関連ある和洋書を合わせて3,025冊を所蔵している。

本年度における取書数と総計は次表のとおりである。

区 分	美 術 関 係		芸 能 関 係		保 存 科 学 ・ 修 復 技 術 関 係		計
	和 漢 書	洋 書	和 漢 書	洋 書	和 漢 書	洋 書	
2 年 度	475冊	8冊	454冊	4冊	25冊	4冊	573冊
総 数	40,068 "	4,059 "	8,973 "	115 "	2,010 "	1,015 "	55,270 "

2. 資 料

美術関係資料

実物よりの直接撮影を主にした写真資料の作成整理と、購入写真、複写写真による補足整備に加えて、印刷物中の図版をもおさめるという方式で、当研究所設立当初より一貫して力を注いできた写真資料を有する。それらは日本東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全域にわたり、それぞれ絵画、書蹟、彫刻、工芸、建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数凡そ26万点、原板保有量はほぼ3分の1にあたり、別にマイクロ・フィルム255巻がある。写真資料のほか、拓本、作家伝記資料、落款印章資料、近代・現代作家・団体・作品資料、資料スクラップ等と、図書カード、図版カード、各種索引類など多数。

芸能関係資料

レコード、録音テープ、シネフィルム、ビデオテープ、写真等による芸能資料を数多く備えている。レコードには、毎年各社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和三代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ及び写真は、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、奏演法の解析を中心とした写真、テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。資料別の所蔵数は、つぎのとおりである。

区 分	レコード	録 音 テ ー プ		シネフィルム		ビ デ オ テ ー プ	
		アナログ 方 式	PCM 方式	8 mm	16mm	β , VHS 方 式	8 mm
昭和63年度	34枚	39本	35本	0本	0本	8本	
平成元年度	8枚	24本	54本	0本	0本	23本	
平成2年度	0枚	14本	46本	0本	0本	12本	11本
総 数	7,118枚	2,852本	278本	198本	4本	237本	11本

3. 主要機器・設備

美術部・情報資料部		
名 称	使 用 目 的	備 考
X線透過撮影装置	軟X線照射による絵画・彫刻の顔料・構造等の非破壊分析。	
紫外線照射装置	紫外線照射による蛍光物質の分析。補網・補彩領域の明別。	
顕微鏡装置	双眼実体顕微鏡による美術作品細部の非接触観察。	KARL ZEISS
赤外線テレビ関係設備	赤外線照射による墨線の抽出。下図・銘文等の解説。	浜松テレビ
ビデオイメージスコープ	内視鏡による彫刻作品等の内部観察。	オリンパス
ローカルエリアネットワーク	LANによる情報処理の円滑化。情報の統合・共有化。	NETONE（アンガマンバス）
画像処理装置	デジタル画像処理技術による多角的画像分析。画像データベースの試作。	NEXUS6800シリーズ
光ディスクファイリングシステム	大量の調書・カード類の一括管理。簡易画像データベースの試作。	RIFILE

芸 能 部		
名 称	使 用 目 的	備 考
舞台（視聴室）	実技者を招いて分析研究のための実演を行う。またその実演を舞台に続く調整室で撮影し録音する。	残響時間 0.30/秒
録 音 室	実技者を招いて分析研究のための、良質な録音を行う。	残響時間0.15/秒 アナログ・デジタルの録音可能。
メログラフ	音の高さと強さの細かい変化を正確に計り、分かりやすいグラフで記録して、音楽の科学的分析を行う。	型名 B/T

保存科学部		
名 称	使 用 目 的	備 考
けい光X線分析装置	金属、顔料、岩石、土器などの化学組成を非破壊的に測定する。理学電機製は可搬型である。	フィリップス PW1404 理学電機 TBF01
X線回折装置	粉末にした金属、岩石、土器、顔料などの結晶を同定する。理学電機製は可搬型である。	日本電子 JDX-10PA 理学電機 TBD10
原子吸光分光装置	岩石、土器、金属などに含まれる元素を定量する。	ジャーレルアッ シュ AA8500
誘導結合プラズマ分光装置 (ICP)	岩石、土器、金属などに含まれる元素を定量する。	セイコー SPS1100
質量分析装置	鉛、ストロンチウム同位体比測定から、青銅、岩石の原料産地を推定する。	VG Sector
イオンクロマト分析装置	岩石、鏽中の陰イオン濃度や空気中のSOx、NOx濃度の測定を行い、鏽の進行状況や空気汚染の程度などを推定する。	横河電気 IC500P
ガスクロマトグラフ	博物館内や古墳中の気体の化学組成を測定する。	日立 163型
電子スピン共鳴装置	遷移金属イオンや劣化に伴って生じるフリーラジカルを測り、劣化の進み方や程度を知る。	日本電子 JES-RE1X
化学発光計測器一式	化学反応にともなって放出される微弱光を測り、反応の進み方や劣化の度合いを知る。	東北電子 CL-100
自記分光放射計	分光スペクトルを測定して、展示に用いる光源や紫外線吸収ガラス、フィルムなどの性能をしらべる。	日本分光 SR500B
走査電子顕微鏡	高倍率で試料表面の状態を観察するとともに構成元素の分布を調べ、構成材料や構造、技法について知る。	日本電子 JXA-840
工業用X線検査装置	透視撮影によって彫刻・工芸・考古遺物などの構造や光電子撮影によって絵画の顔料をしらべる。	フィリップス MG321 他
減圧燻蒸装置	文化財加害生物を防除するための燻蒸法の研究を行う。	SK 2型
生物顕微鏡	微生物プレパラートを透過光および落射蛍光にて観察し、加害生物種の同定などをおこなう。	ニコンマイクロ フォト FX
微生物検体作製装置	微生物胞子の発芽に及ぼす風の影響をしらべる。	小林精機 CP型

研究施設・設備

修復技術部		
名 称	使 用 目 的	備 考
減圧含浸装置	脆弱化した文化財に減圧下で樹脂を含浸する装置	共和真空
プラズマ装置	酸化した出土金属遺物を水素プラズマを利用して還元処理する。	神港精機 MP1017
エアブラッシュ	出土金属遺物の錆や泥をクリーニングする。	S.S WHITE K
真空凍結乾燥機	水浸木材等の有機遺物を乾燥処理する。	共和真空 RLW-20MB
サンシャインウェザーメーター	修復材料等の耐候性試験	スガ WEL-SUN-DC
強度試験機	紙・布の各種処理後の強度を測定して、処理法による影響を判断する。	島津 AC-25TB
紫外線フェードメータ	塗料・有機材料の耐候性試験	スガ

4. 黒田記念室

黒田記念室は、本研究所の創立者帝国美術院長子爵故黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であり、黒田清輝の油絵・素描・写生帖等を収蔵している。

創立当時、主として黒田家から寄贈されたものは、油絵125点、素描170点、写生帖等であるが、その後黒田照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なるものは、「智・感・情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」などである。

5. 観 覧 室

本研究所情報資料部の図書写真及び各種研究資料は、主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等の利用に供している。年間の閲覧者数は、約313名である。

Ⅵ. 関係法規

◎文部省組織令抄 (昭和59年 政令第227号
最終改正 昭63政101号, 197号)

第2章 文化庁

第3章 施設等機関

(施設等機関)

第108条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国立国語研究所を置く。

2. 前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国際美術館

国立文化財研究所

(国立文化財研究所)

第114条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2. 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3. 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は、文部省令で定める。

(研究施設の指定)

第115条 国立国語研究所及び国立文化財研究所は、法第5条第37号に規定する政令で定める研究施設とする。

◎文部省設置法施行規則抄 (昭和28年 文部省令第2号
最終改正 平2文令13号)

第5章 文化庁の施設等機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 名称及び位置

(名称及び位置)

関係法規

第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第1款の2 東京国立文化財研究所

(所 長)

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2. 所長は、所務を掌理する。

(内部組織)

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課、次の五部及びアジア文化財保存研究室を置く。

- (1) 美 術 部
- (2) 芸 能 部
- (3) 保存科学部
- (4) 修復技術部
- (5) 情報資料部

(庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- (1) 職員の人事に関する事務を処理すること。
- (2) 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- (3) 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- (4) 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- (5) 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- (6) 庁内の取締りに関すること。
- (7) 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

(美術部の二室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室及び第二研究室を置く。

2. 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
3. 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行うとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。

(芸能部の三室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

2. 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
3. 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
4. 民俗芸能研究室においては、民俗芸能及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(保存科学部の三室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室及び生物研究室を置く。

2. 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究(分析化学的調査研究を含む。)を行い、並びにその結果の公表を行う。
3. 物理研究室においては文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
4. 生物研究室においては文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(修復技術部の三室及び事務)

第122条の2 修復技術部に、第一修復技術研究室、第二修復技術研究室及び第三修復技術研究室を置く。

2. 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項及び第4項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
3. 第二修復技術研究室においては、紙、布又は革を材料とする文化財の修復に関す

関係法規

る科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

4. 第三修復技術研究室においては、石、土又は金属を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

(情報資料部の二室及び事務)

第122条の3 情報資料部に、文献資料研究室及び写真資料研究室を置く。

2. 文献資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る文献資料その他の資料(写真資料を除く)の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

3. 写真資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る写真資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

(アジア文化財保存研究室の事務)

第122条の4 アジア文化財保存研究室においては、アジアの文化財及びその保存に関する資料収集並びに調査研究及びその結果の公表を行う。

東京国立文化財研究所要覧（平成2年度）

平成4年3月5日 発行

発行所 東京国立文化財研究所

〒110 東京都台東区上野公園13-27

電話（3823）2241（代表）
